
虚構世界の魔法使い

緋鉈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚構世界の魔法使い

【NZコード】

N9154Y

【作者名】

緋鉛

【あらすじ】

「長く生きてれば、もつと賢くなれると思つてた。間違えも、過ちも、後悔もしなくて済むようになると、そう思つてた」

過去の罪を贖うための、先の見えない旅の途上。ある時訪れた町の中で、一人は一人の少女と出会つた。人々の淘汰を図る魔術師達と、魔術師の殲滅を掲げる人々と。幾つもの思惑の狭間で、過去を奪われた少女は己の進むべき道を摸索し、過去を引き摺る一人は新たな居場所を探し求める。

序章　過日の記憶

一帯を覆う分厚い雨雲は、今日も青空を隠している。

太陽は淀んだ雲の向こうに隠れ、もう何年もその姿を見せていない。それだけでも十分に異常ではあるのだが、加えてもう一つ、看過來ない問題が中空を埋め尽くしていた。

見上げる曇天に光る無数の白い粒は、季節を無視してこの数年間降り続いている雪である。降雪量が大して多くないことだけが、唯一救いであると言えるだろう。

それはとある地域のみで見られる、局地的な異常気象。

一般的には、そう思われている。

その地域　ラモネアの町は、氷雪都市の通称を持つ大きな町だ。北の大陸に存在し、元来降雪量の多い町であつたことが、人々の意識からその異常性を多少和らげているのだろう。

冬が終わって芽吹きのない春が訪れ、晴れない曇天に不審を覚えながら夏を迎える。降り止まない雪に怯えて秋が巡り、不作を嘆きながら厳寒の冬を耐え忍ぶ。

一年の半分を雪に覆われた土地に生きる人々といえど、この異常気象はさすがに享受出来るものではない。そういう土地柄であろうと、寒さにある程度の耐性があるうと、作物さえろくに育たないのでは生活出来ようはずもないのだ。

最初の年は、近隣の町からの支援を得て凌いだ。

翌年は、事態を重く見た南の大陸から支援の申し出があった。

それから数年、異常気象はその原因も不明なまま、対策もなくに打てないまま、今日まで続いているのが現状である。ラモネアの町を離れた人間も少なくはない。

見捨てられた土地だと、嘆く者がいた。

人々の業が招いた結果だと、怒る者がいた。

自然の猛威を前に抗う術はないと、腐る者がいた。

「 私、ですか？」

降り続く雪に埋もれ、住人を減らし、治安は乱れて活気の失われたラモネアの町。

その町の片隅に、葉を付けることを忘れた木々に囲まれながら存在する建物が一つ。元より閑静な自然の中にあって、その建物は一層沈んだ雰囲気を纏っていた。

「血縁者であるステルシア・フィオンズ・エルニカ様を、という話です。慈善事業というわけではありません……孤児だからといって、誰も彼もというわけにはいきません」

「血縁者…………ほんとに？」

「はい」

その建物 孤児院には現在、院長夫妻を含めて十五人の人間が暮らしていた。

先の戦争が終わってから、まだ十数年しか経っていない。世界中を巻き込んだ戦争によって乱された平穀が、それだけの年月で整う道理もなく、ここで暮らす孤児の半分以上は戦災孤児であった。

残る数人はこの数年の異常気象に起因する口減らしか、何らかの事情で両親と死別したか、である。

ステルシア・フィオンズ・エルニカがこの孤児院へ迎え入れられたのは六年前で、奇しくもそれは、この止まない雪が降り始めた頃だった。つまりステルシアは戦災孤児でもなければ口減らしでもない、別の とある事情で両親と死別した孤児である。

だからこそ、

大分今更ではあるが、今回のように迎え入れる人間が現れたこと自体は、特におかしな話だというわけではない。

長い時間を孤児院で過ごして来た院長にとつても、これが初めての経験というわけではないのだ。

「…………ふむ」

突然現れた来客者を一瞥し、院長は目を閉じて自らの頭を撫で付ける。

十五人もの人間が暮らすには、少々手狭と言わざるを得ない孤児院の応接室。そこでは現在、院長夫妻とステルシア、それから来訪者である黒いスース姿の女性が小さなテーブルを囲んでいた。

元より広い部屋でもない上、テーブルとソファー、壁に並ぶ本棚と暖炉、窓際に陣取る執務机のおかげで部屋は余計に狭く感じられる。

中央のテーブルを囲み、上座に座るのはステルシアだ。

その左側には、院長夫妻。ステルシアの右手で、つまり院長夫妻と向かい合う席にはスース姿の女性が腰掛けている。

客間の扉の向こうで時折聞こえる足音は、孤児達が聞き耳を立てているからだろうか。

この日、ステルシアに里親が現れた。

それは院長夫婦にとって、寂しいと同時に喜ばしいことでもある。今年で十六歳になつたステルシアも、年齢的には孤児院を出でてい頃合だ。

だが、今の荒廃したラモネアに一人放り出されたところで、生活していくのは難しいだろう。そんな事情があるからこそ、未だこの孤児院に居続けているのが現状である。

「……少し、よろしいですかな」

「何でしょう」

難しい顔をした院長の問い掛けに、スース姿の女性は変わらない調子で答える。

「エティカ様、と申されましたか」

「はい、エティカ・ヴィエリ・ビースと申します。呼び捨てで構いません」

エティカと名乗った女性も、まだ随分と若く見えた。

ステルシアと並べてみれば、姉妹としても通じる年齢だろう。

ステルシアは黒の長髪と、銀を散りばめたような青い瞳を持っている。対してエティカは髪も瞳も明るい栗色で、顎の高さで切り揃えられたショートヘアは、毛先に少しだけウェーブがかかっていた。

「」の一人の姿では、年齢「」を近くとも「姉妹だ」などとは通用しないだろうが。

「……」

まるで声音を変えないエティカの受け答えに、院長は少しだけ渋い顔をした。白髪の目立ち始めた頭を撫でつけ、小さく溜め込んだ息を吐く。

さすがに三十歳近くも年下の女性に尻込みすることはないが、まるで機械を相手にしているようでは調子が狂う、ところが院長のエティカに対する印象だった。

「……ステルシアはこの院に来て六年になります。何故、今更になつてそのような話を？」

「当主様は『民間防衛機構』^{クロム}の重役で御座います。先の大戦から続く混乱もあり、ステルシア様のご両親がお亡くなりになられたことも、これまで耳に入れる機会に恵まれなかつたのだ、と聞いてあります」

院長とて、ステルシアを里子に出すことを済らつもりはない。いつまでも孤児院に置いておくわけにもいかないし、年齢的にも一人立ちの時はそう遠くないと覚悟はしていた。

勿論、惜しむ気持ちもないわけではない。六年もの長い時間を一緒に暮らしてきたステルシアは、実子のいない院長夫妻にとって実の娘も同然だつた。

孤児たちの中では年長者である、と自覚してのことか、あるいは生まれ持つた性か。

他の孤児達の面倒もよく見ててくれるし、家事の手伝いも自ら引き受けてくれる気立てのよさ。

だからこそ、ステルシアを引き取りたいと申し出る里親がどういう人物なのか、見極めたいという思いも芽生える。

「……ステルシア。この話、お前はどう思つ？」

問われて、ステルシアは「私？」と小首を傾げてみせる。

院長にとつて、今回の話は願つてもないほどの好条件だつた。里

親の名前はこんな辺境に住む自分達でも知つて居るような『民間防衛機構』の重役である。どう転んでも、悪いようにはならないだろう。

少なくとも、この荒んだ町でこれから的人生を浪費するより、幾分有意義であるはずだ。

「私は……うん、その人に会つてみたい。何か思い出すことも、あるかも知れないし」

「……そう、か。お前がそう言つのなら、私達も喜んで送り出すとしよう」「ひよー

「じこちゃん……」

「……院長と呼べ」

呆れたように、それでいてどこか嬉しそうに、院長は田元を和らげる。

話が纏まると、Hティカは三日後に迎えに来ると言い残して孤児院を後にした。

荷造りのための時間と、六年もの長い時間を過ぎたこの場所とのお別れのための猶予だ。いつもより少しだけ豪華な夕食と、お別れの挨拶と。

「お姉ちゃん、どこか行つちゃうの?」「お金持ちのところに行くんだろ?」「もう会えなくなっちゃうの?」「いいなー、毎日美味しいもの食べられるんだね」「あたしも、ねーちゃんと一緒に行きたいつ」「また一緒に遊べるよね?」

まだ幼い孤児達の反応は、湿っぽさのないどこかあつれつしたものだった。

物心ついた頃にはここで暮らしていた、といふ事情もあるのかもしない。

逆に「お別れ」の意味を知つてゐる孤児達は、あまり言葉を並べない。

涙を堪える彼等、彼女等の頭をステルシアは優しく撫でお別れの言葉の代わりとした。

約束した三日目の朝は、思うより早く訪れた。

冷たく、澄み切った朝霧の中、孤児院の玄関で院長とステルシアは静かに佇む。

相変わらず降り続く雪は、塀に囲まれた敷地を白く染め続いている。

庇の下で雪を凌いでいるステルシアは、雪の重量で庇が潰れたりしないだろうかと益体のないことを考えていた。

ステルシアの、どこか物憂げな視線で空を見つめる姿に院長は頬を緩める。普段と変わらないステルシアの態度に、院長は言葉に出来ない寂しさを感じていた。

ステルシアが何を考えているのかを知れば、その感動も溜息に変わらだらうことは想像に難くない。

他の孤児達は、まだ眠りの中にいることだらう。

院長の妻は、やがて起きて来るであらう孤児達のために朝食の準備をしている。ステルシアとの別れの挨拶は、先ほど済ませたところだ。

「…………」

会話らしい会話も交わさないまま、ただ時間が過ぎるのを待つ。それから間もなく、孤児院を訪ねて来たのは一組の男女だった。

男の方は、細身で背が高い。

目に痛い程の鮮やかな赤いコートに身を包み、フードの奥には黒い前髪と、細く吊り上がった金色の瞳が覗いている。町を歩けば擦れ違う子供達を一人残らず泣かせてしまえそうな、いかにも凶悪な相貌だった。

その男より二歩後方に佇むのは、栗色の長髪と茶色の瞳を持つ女だ。どこか気品の漂う純白の浴衣に淡い紅色の羽織を纏い、大きめの白い雨傘を両手で握り締めている。

栗色の髪や、落ち着き払つた仕草とその優美な立ち姿は、確かにエティカにも共通する特徴ではある。だが、エティカの髪は長くないし、瞳の色も少々異なる。

つまるところ、ステルシアにも院長にも面識のない相手だ、ということだ。

最初、院長とステルシアは彼等をエティカの関係者かと考えた。

「ここが中心、なんだよなア？」

訝しむ院長とステルシアを無視して、赤いコートの男が背後に控える女に問う。見ようによつては微笑んでいるように見えないでもない無表情のまま、女は静かに頷いた。

それを確認した男は、口の端を吊り上げてステルシアと院長へ向き直つた。その獰猛な笑みを前に、院長は凡そその状況を把握し、強張つた声を上げた。

「ス、ステルシア、早く中へ」

逃げなさい、と続くはずの言葉が、ステルシアの耳に届くことはなかつた。

その代わりに届いたのは視界を染める赤と、鎧びた鉄の臭い。コマ送りの映像を追いかけるようなスローモーションの世界の中で、倒れ行く院長の姿を呆然と見送るステルシア。

「…………じ、い……」

何が起こつたのか。

何故院長が血を流しているのか。

何故門の前に立つ男は笑つているのか。

頬を濡らす感覚に意識を呼び戻されて、緩慢な動作で持ち上げた右手が頬に触れる。

自らの意思で動かしているはずの右手なのに、ステルシアにはそれが自覚出来ない。

意識が身体から離れてしまつたような、まるで他人の身体に視点だけを移してしまつたような、どこか現実離れした感覚。ぬつとした感触に、頬を撫でた右手が滑り落ちる。

震える掌を広げ、視線を落とす。

ステルシアの意識を飲み込むように、掌の赤色は一瞬で視界を覆う。

ステルシアの意識は、そこで途切れた。

第一章 大灯台の町 第一話

交易都市とも、海上都市とも呼ばれる港町アトレータでは、毎年秋の季節に灯台祭と呼ばれる航海安全祈願のお祭りが催されている。三つの大陸と三つの海がぶつかる海域に、岬の如く突き出した形状。それがアトレータの町の姿である。

元々この海岸は、一帯を断崖絶壁に囲まれた高台でしかなかつた。在るのはただ、海岸の位置を知らせるための灯台のみだつたという。アトレータの通称、海上都市の由来がここにある。

三つの海流がぶつかり合い、一年を通して荒れ続ける海の向こう。北の大陸には冰雪都市ラモネアが鎮座し、東の大陸には独立共和国都市ファンドーラが控えている。共に大陸の玄関口として大きな港を持つ町であり、最も広大な面積を持つこの大陸に港がないのでは、何かと不都合が多かつたのだという。

そういう事情が発端となつて、先人達は断崖絶壁の海岸を少しずつ切り崩し、埋め立て、岩と木材で足場を広げ、やがてその場所に町を造つた。

海の上に浮かぶ人工の町、アトレータの完成だ。

高台を切り崩す際に取り壊された灯台に代わり、新たに建てられた二つの大きな灯台を町のシンボルにして、アトレータの町は長く繁栄を続けている。交易の拠点としてもそう、観光地アトレータ大灯台としても、そう。

「とまあ、年中荒れ続ける海だから遭難する船も多くてね。航海の安全を願つて、船を導くために海を照らさう、という考えがこの灯台祭の始まりらしいよ」

切り崩された高台の両脇、北と東の大陸をそれぞれ照らす役割を持つ大灯台は、観光地として機能出来るように、内部に展望室が設けられている。

「……今年も灯台祭の時期が来た、とは言え……ねえ」

遠く、ラモネアを臨めるはずの展望室からも、今は空を舞う粉雪しか見ることが出来ない。空は灰色に染まり、大気は真冬のように冷え切つていて。

灯台祭のコンセプトは、海を照らして航海の途上にある船に道を示すこと。

であるから、この祭りの期間中は町全体、夜通しで明かりを点す。大灯台の灯は虹色に染め上げられ、夜毎五千発の花火が打ち上げられる。

通りには数多の露店が並び、波の荒れない近海には屋形船が犇めき、町を埋め尽くさんばかりの観光客が各地から集まる、大陸でも首位を争う規模の一大イベントだ。

「打ち上げ花火って、この雪でも大丈夫なのかな。ベルはどう思う？」

「…………」

窓の向こうへ、まだ昼間だというのに薄暗い眼下の雪景色を眺めながら、少年はテーブルの対面に座る少女に話し掛ける。話し掛けられているはずの少女はしかし、少年に一切の反応を返さない。

その二人は、どこか対照的な姿をしている。

少年の方は、黒いコートを着ていた。長めの前髪は野暮つたい印象を振り撒き、どこか作り物めいた笑みが見る者の不信感を煽つている。

傍らには細長い布袋が立て掛けられており、黒地に金色の刺繡でおだまき
苧環があしらわれたその意匠は、持ち主の纏つ空気にそぐわない静謐さを漂わせていた。

一見無害そうに見えるが、どこか近寄り難い。

道行く人々が抱く、少年 コーリテイトの印象は概ねそのようなものだった。

対して、テーブルの対面に腰掛ける少女 ストリベルは、少々

人目を引く格好をしている。

精々十歳かそこらであろう小柄な身体を包むのは、明らかにサイズの大き過ぎる白いウインドブレーカー。椅子に座っていても、その裾が踵にまで届いていれば不審に思われても無理はない。その左袖は刃物で引き裂かれたかのようにズタズタで、転んで破れましたでは言い訳にもならないだろう。

裸足という要素もまた、その珍妙さに拍車をかけている。

更に、田深に被られたフードの内には田元を覆う仮面が覗いていた。それは人の顔を連想させない金属質の白い仮面で、動きのない口元の表情と相まって、酷く不穏な雰囲気を放っている。

フードの中から零れた髪は、肩に届かないストレートだ。それは対面に座るコーリテイトと同じ煉瓦色をしていて、コーリテイトの瞳が髪と同じ色をしている辺り、仮面の下に隠れたストリベルの瞳も同様の色を持っているのだろうと推測出来る。

「それにしたつて、何なんだろうね……この雪は」

呟いて、コーリテイトは空を見上げる。

例えば冰雪都市と呼ばれるラモネアのような北国ならば、この時期でも雪は降っている。

というより、この数年間降り続けていた。

だが、長く異常気象と騒がれ続けたラモネアの常雪も、ほんの数日前に治まったのだという。それがどういうわけか、今度はこのアトレータで雪が降り始めた。

異常気象が珍しくもなくなつたのは、もうずっと昔の話だ。局所的な集中豪雨、頻発する台風に地震、冷夏に暖冬、そして 大雪もまたその一つである。

時間にして約六年。

異常気象としても異常な期間降り続いた雪は、そのあまりに長い期間故にそれ以外の可能性をも否定していた。

「でも、さ。これはつまり……そういうことだよねえ、ベル？」

「…………」

そうして視線を戻すも、ストリベルは黙したまま身動きさえしない。その素つ気ない、なんて言葉では足りない冷たい態度にも、ユーリテイトは不満一つ漏らさない。

平日の昼間という事情もあるが、何より外が雪による視界不良であるから、展望室には人が少なかつた。

いかにも暇を持て余してますといったユーリテイトとストリベルの他には、いかにも仕事してますといったスーツ姿の男女や、いかにも休憩中ですといった私服姿の男達や、女達。いかにも観光中ですといった大荷物の大人達に、いかにもデートしてますといった軽装の男女。それからいかにも遊びに来ましたといった風情の少女の姿があるばかりだ。

スーツ姿の男女や、軽装の男女達はユーリテイトとストリベルを意識的に無視していた。見るからに普通ではない「兄妹」であるから、誰も自ら関わろうとは考えないのである。

少し世の中に目を向ければ、異常者や変質者、それから 異能者とも呼べる人種は、それこそ数え切れないくらいに溢れ返っている。

その手の人種には、無暗に関わらない方が賢い。

誰に諭されるまでもない、それは常識だ。

そんな常識を真っ向から無視して、タツタツタツと軽快な足音を連れた少女が一人、ユーリテイトの側を通り過ぎて窓に張り付いた。冷たい窓に両手を付いて、少女は「たかーい」だの「すごーい」だの「おおーう」だと無邪気な唸り声を上げている。

その反応を背にして、ユーリテイトは少女を観光客の類だろうかと頭の片隅で考えた。

年齢的には精々十代半ばにしか見えない。学校に通っていないことにも、きっと何か事情があるのでだろう。このご時世、それは大して珍しくもないことで、詮索する意味もない。

「ねえねえ、あのさ

「んえ？」

突然掛けられた声に、コーリテイトは氣の抜けた声で答えた。

人々が見せるコーリテイトへの態度は、今この灯台にいる他の客達のそれが常であり正常とも言える。故に、まさか自分が話しかけられるとは思つていなかつたのだ。

自らの醜態を自覚して口元を引き締め、話し掛けてきた少女が自分を見ていると確認してから、コーリテイトは「何かな、お嬢さん」と言い直した。

少女は一瞬驚いたように目を丸くして、それから朗らかに笑つてみせる。

「お嬢さんつて、そんなに年離れてるよには見えないよ？」

「……ああ、それもそうだね」

コーリテイトは思い出したよつに相槌を打つ。

「それで、僕に何か？」

「あ、うん。何だか最近町が明るいから、何があるのかなって」

「……うん？」

町の様子に心当たりがない辺り、祭り日当での観光客というわけではないのだろう。

「……灯台祭、つて祭りがあるんだよ。船を導くために海を照らす、つて『コンセプト』でね」

「そつかー、それでこんなに明るくしてるんだね」

そう言つて、少女は薄暗い雪空を眺める。

遮られた太陽の光に代わり、町の光が灰色の雲を仄かに白く染めている。

「……祭りは初めて？」

「どうかな、多分初めてだと思つよ」

「……そうかい」

特に思い詰めた表情も見せず、少女は窓の外をじっと見詰め続けている。その様子を横目に見ながら、コーリテイトは少女について考えていた。

腰まで届く黒髪と、銀を混ぜたような青い瞳。年の頃は、外見が

そのまま実年齢として認識出来るなら十代半ば。妙な言い回しではあるが、外見と実年齢が一致しない人間をユーリティトは何人も知つてゐる。

服装はタートルネックのセーターに厚手のジャケット、七分丈のジーンズに茶色のブーツというどこにでもいる少女のそれだ。

見たところ、特におかしなところはない。発する言葉に少々違和感が残るが、何かしらの事情があるのだらうと考えられる。

「お祭りはもう始まつてゐるの？」

「……いや、明日からだよ。今はまだ準備期間」

「明日、か……」

それからまた少し、少女は唸りながら考え込む。

ユーリティトは少女から視線を戻し、ストリベルと向き直る。

明日から始まる灯台祭には、外の町からも多くの人間が集まるだろう。当初は、そうなる前に町を移動するつもりだったのだが、この数日で事情は大きく変わつてしまつた。

ラモネアで発生した常雪が、今は海を越えたこのアトレータで継続している。正直なところ、六年もの長い時間というのが気になるところではあるが、ユーリティトの中でそれはもう確信として意識に根付いてゐる。

この常雪は、自然現象ではない。

人為的な事象の改編 魔術によるものだ。

誰が行使する魔術で、どういった意図があるのかは分からぬ。だが六年間という、魔術としては異常とも言える長期間に渡つて行使され続けてきたこの事象改編に、何の意味もないとは思えない。ラモネアからアトレータへ干渉領域が移つたこと。それが丁度、灯台祭の時期であることもそつた。

何がが起きるであろうといつて、直觀にも似た予感がそこにはあつた。

「ねえ、あなたは明日もこの町にいる？」

問われて、ユーリティトは再び少女に視線を向ける。

「それは、まあ……こりと思つけど」

「じゃあ、明日のお祭り、案内してくれないかな?」

行つたことないんだ、と言つて少女ははにかんでみせる。その無垢な表情を前にすると、コーリテイトも少しばかり返答を躊躇つてしまつ。

とは言つても、断らないわけにもいかない。

「……僕等はちょっと、やることがあってね」

「そつかー、残念」

言つほど残念そうな顔もせず、少女は柔らかく苦笑する。

「でもや、まだ町にいるなら、もしかしたらどこかで会つかも知れないよね」

「……可能性はあるかな」

「その時はまた、話し相手になつてくれる?」

「そのくらいなら、構わないよ

嬉しそうに笑つて、少女は「ありがと」と呟いた。それからもう一度、少女は窓の外の景色を眺めて、緩んでいた表情を引き締めた。

「ステルシア様」

その声は、展望室の出入り口の方から聞こえてきた。ユーリティトが振り返ると、そこには黒いスースを着た女性が一人、窓際に立つ少女を視線に捉えて佇んでいた。

ウェーブのかかった明るい栗色のショートヘアと、同色の瞳。年の頃は精々二十歳前後といったところだが、その身に纏う雰囲気はただの女性のそれではない。気配は異様に薄いくせに、その視線は鋭く研ぎ澄まされ、一度目を合わせてしまえば警戒せずにいられないと。

堅気の人間ではない、とユーリティトはその女性を評価する。

「エティカ、どうしたの？」

視線はストリベルへと戻しながら、ユーリティトは意識だけをエティカと呼ばれた女性へと傾ける。視線こそステルシアの方を向いているようではあるが、その代わりとでも言わんばかりに、ユーリティトに対してはひどく威圧的な、どこか重苦しさを感じさせるような無関心を態度として表していた。

エティカの元へ歩み寄り、幾つかの言葉を交わすステルシア。初見のユーリティトから見ても、一人の間には主従関係のようなものが成立しているように映った。

やがて話を終えると、ユーリティトの元へステルシアが駆け寄つてくる。

「私、もう帰らないと」

「……そつか」

それから思い出したように、ステルシアは照れ笑いを漏らした。

「そういえば、まだ名前も知らないや」

ステルシアはユーリティトから視線を外し、ずっと反応のないストリベルを見遣る。顔を上げることさえしないストリベルに、ステ

ルシアは小首を傾げるだけで何も言わない。

「 私、ステルシア。ステルシア・ファイオンズ・エルニカって言います、よろしくつ」

「 そう名乗られて、ユーリティトも名乗り返す。

「僕はユーリティト・アルセラ・グラント。呼ぶ時はユーリでいいよ」

また会うことがあればだけど、とユーリティトは心中で付け足す。

ユーリティトが名乗った後、ステルシアは対面に座るストリベルへ視線を移す。それでも、相変わらずピクリとも動かないストリベルを前に、ステルシアは少しだけ困ったような表情を浮かべた。

「ああ、そっちはストリベル。ちょっと事情があつてコミュニケーションを取るのは難しいんだけど、僕の妹だと認識してくれていいよ」

「 ほうほう、そうなんだー。よろしくね.....えーっと、ベルちゃん特に言及することもなく、ステルシアはストリベルへ笑い掛ける。ストリベルは人形のように姿勢を変えないが、ステルシアがそのことに対して気分を害している様子はない。

その光景を見てユーリティトは少しだけ口の端を緩め、逆にエティカの纏う空気は加速度的にその重さを増し、張り詰めて行くようだつた。

何故これほど露骨に敵意を向けてくるのだろう、とユーリティトは訝しみながら、どうせすぐにお別れだとエティカを無視し続ける。笑顔で手を振り、エティカと幾つかの言葉を交わして、ステルシアは一人で展望室から姿を消した。

ユーリティトは手を振り返してステルシアを見送り、その視線をそのままエティカへと固定する。

最早隠す必要もない、ということだろうか。

ステルシアがまだこの場に居た時に感じていた敵意は、今や殺意と呼んで差し支えないほどに膨れ上がっている。その表情も使用人のそれではない、戦場を知る者のそれだ。

展望室の出入口から動かないエティカの無表情に、様子見に徹していた他の客達は競うように席を離れ始めた。展望室の出入口は一つあり、エティカのいない方の出入口から客達は走り去る。叫び声一つ聞こえないのは、まだ決定的な「事」が起つていなからだろうか。

展望室の出入口で僅かに身構えるエティカと、椅子に座つたまま動かないコーリテイトとストリベル。走り去る客達の足音が消えて静寂が訪れた頃、広い展望室には無言で向かい合つ三人だけが残つていた。

その沈黙を破つたのは、エティカの誰すいか何だつた。

「コーリテイトさん、でしたね。貴方は、何者ですか？」

「何者つて……そうだね。ただの旅人だよ」

どうやらその答えに満足いかなかつたようで、エティカは目を細くして値踏みするようにコーリテイトを見詰める。

「…………ストリベルさん……そちらの少女は本当に妹ですか？」

「……、僕が娘のいるような年齢に見えるのかい？」

「そういう意味ではありません」

それからエティカは、少しだけ言い淀むようにしてストリベルを一瞥する。仮面に隠れて表情は見えず、露出している口元も動かず、指の一本さえ凍り付いたように反応がない。そこから推測出来るストリベルの心情など、皆無と言つていいだろう。

諦めか、割り切りか、あるいは確信か。

エティカはコーリテイトに視線を戻し、口を開けつつとして、出来なかつた。

「世の中には、知らないままでいる方が幸せなこともあるんだ

よ

「…………」

「ツツ」と足音が聞こえて、エティカは自身が一步後退つていることを認識する。

気圧された、と氣付いて、エティカは自身の慢心を自覚し、眉根

を寄せた。決して油断していたつもりはないし、相手を格下と見ていたつもりもない。

だが、こうして後退つた拳句、言葉の一つも返せなかつたことが事実であり、結果だ。

これまで切り抜けてきた実戦の経験が、その記憶が、心のどこかで驕りを生んだのだと、エティカは結論付ける。

この煉瓦色の髪を持つ魔術師は、決して楽に倒せる相手ではないだろう。

追及を拒絶する言葉を発した後、ユーリティートはエティカへの興味は失せたと言わんばかりに視線を逸らし、ストリベルと二人して椅子から腰を上げた。

その際手に取つた細長い布袋は、恐らく武器の類を収めたものなのだろう。

何かする気がとエティカは警戒するが、ユーリティートはその警戒を無視してストリベルの右手を取り、先刻他の客達が逃げ出した出入り口へ向かう。

「ま、待つて下さい」

エティカは反射的に声を掛けた。

引き止めるべきではないのかも知れない、という思いがなかつたわけではないが、エティカはその弱気な思考を圧し殺す。そうしても、確認しないといけないことがあるのだ。

とはいえる、ユーリティートにエティカの事情は関係ない。待てと声を掛けたところで、恐らく待つてはくれないだろうとエティカは頭の隅で考えていた。

「何かな？」

だが、ユーリティートは意外なほどあっさりと足を止める。

「……あ、あの」

返事があつたことを意外に思いながらも、エティカはこれ以上ペースを乱されまいと自身がやるべきことを思い返す。

深呼吸をして、一旦思考を停止させ、そうして冷静さを取り戻す。

怪訝そうな表情を浮かべるヨーリテイトと、振り返ることすらしないストリベル。悪い人間には見えないが、胡散臭い身形であることに変わりがない。

エティカは意識してヨーリテイトを睨み付け、腰の後ろに隠していた拳銃に手をかける。

「貴方は『教導魔術師団』^{ガルム}の関係者ですか？」

エティカの問いかけに、ヨーリテイトは目を丸くして黙り込む。ヨーリテイトには、この場面でエティカから何故そんな名前が出てくるのかが理解出来ない。驚くよりも、訝しく思う気持ちが先に立つ。

「…………関係者ではない、と言つて君は信じるのかな」「この町にいる理由は何ですか」

先刻までと様子の変わったエティカに、ヨーリテイトは不審を覚える。

察するに、そう。

まるで『教導魔術師団』がこの町へ来ることを知つていて、それを警戒しているような振る舞いだ。では、ただの使用人ではないだろうエティカが、ステルシアに付き従つている理由は何だろう、と考えると、話の流れを推測するのは容易い。

つまり、ステルシアは『教導魔術師団』に狙われている身で、エティカはその護衛なのだろう。あの、どこにでもいそうな少女にしか見えなかつたステルシアも、そうなるとそれなりに身分の高いご令嬢なのかもしれない、とヨーリテイトは推測した。

「……人を探していくね。君には関係のない話だよ」

結局のところ、ステルシアの正体がどうであれ、エティカの事情がどうであれ、ヨーリテイトには関係のない話だつた。わざわざ自分から厄介事に首を突つ込む趣味もなければ、無理に関わる意味もありはしないのである。

少なくとも、今のところは。

「行こうか、ベル」

「…………」

返事を待たず、コーリテイトはストリベルの手を引いて展望室を後にした。

その後ろを、エティカが追つてくる様子はない。

地上へと続く螺旋階段を下りながら、ユーリティットは物思いに耽る。

ステルシアとエティカの事情は、確かにユーリティットには関係のないものだ。

だが、そこに『教導魔術師団^{ガルム}』が絡んでくるのなら、無関係だと切り捨てるわけにもいかない。今はまだ関わりたくないという思いはあるが、ユーリティットがユーリティットである限り、その名が背負う責任から逃れることは出来ないのだ。

その責任を負う資格が、今もまだ存在するなら。

沈んでしまいそうになる思考を中断し、ユーリティットは溜め息を吐く。

思い出す光景は、もう随分と昔の、終わってしまった記憶の断片でしかない。今更なかつたことには出来ないし、思い悩んでも仕方ないことなのだろう。

そう分かっていても、気分が沈んでしまうのは止められなかつた。それ故の、後悔だ。

人は生きている限り、過去を切り捨てることは出来ない。一度起こつてしまつたことを、やり直すことも出来ない。それ故に考えてしまうのは、どうすれば修復出来るのか。

一度壊れたものを、どうすれば作り直すことが出来るのか、ということだ。

「動くな」

長い螺旋階段を下り終え、一階の広間でユーリティットを迎えたのは、黒いスーツを着た三人の男達だった。拳銃を構える黒い短髪の男が一人と、その中間には短剣を握る灰髪の男が一人。それ以外の人間の姿がない辺り、事前に人払いを済ませたというところだろうか。

タイミングや服装を見る限り、エティカの関係者であることは考
えるまでもないだろう。

ユーリティートは言われたまま足を止めて、状況の把握に努める。
彼等は何故、自分に銃を向けているのか。
事前に人払いを済ませたのは、民間人を巻き込まないためだろう
か。

その手段が合法的なものであるのかどうかも、気になるところだ。
だが、ここは観光名所としても有名なアトレー・タ大灯台で、当然
だが警備員だつて少なくない。騒ぎになつていらない辺り、その行動
を合法的なものだと仮定して、目の前の彼等は当然のように拳銃を
所持している。

それから『教導魔術師団』に対する警戒と、魔術師たるユーリティ
イトに銃を向ける理由を考えれば、導き出される結論はユーリティ
トの知る限り一つだけである。

「悪いが、身元が割れるまで身柄を拘束させて貰う」

名乗りもなければ、一切の説明されない。

横暴と呼ぶに相応しい、一方的な宣言だった。

「……突然だね。僕が何か、問題でも起こしたかい？」

「魔術師である、というだけで十分だ」

そもそも、何故魔術師だと判断されたのだろう。

そう思つたが、わざわざ確認を取ることはしない。

恐らくは、エティカとの会話からそう推測されたのだろう。

エティカに疑われたのは、やはりリストリベルの奇抜な格好のせい
だろうか。奇抜な格好をさせている本人である自身を棚に上げて、
ユーリティートはそんなことを考える。

「……事が起つてからでは、何もかも遅過ぎる」

そんな不当な扱いも、ユーリティートには慣れ親しんだものである。
今更怒る気もしなければ、説教の一つでも垂れてやろうという気にも
ならない。

かといって、勿論大人しく拘束されてやる義理もない。

「言つておぐが、魔術など使うだけ無駄だ。我等にそんなものは通用しない」

「……へえ、それは怖いね」

普段通りの無害そうな微笑みを浮かべたまま、コーリテイトはその意識化で一つの魔術を念じる。男が本当のことと言つてはいるとは限らないし、仮に魔術が正常に発動するならその方がこの場を離れるのに好都合、という打算もある。

例えば物語の中で語られる魔術や魔法は、詠唱や魔方陣、あるいは何らかの触媒を利用した儀式や、杖や本のような補助具を使用するといったものが主流で、定石だ。だが、実際のところそれらは絶対に必要、というわけではない。詠唱や、補助具として武器を使用する者は多いが、それはあくまで魔術、魔法の発動を助けるものでしかないのだ。

基本的に魔術の行使に必要な行為は「思う」ことだけ。

魔術や魔法の発動とは、魔術師と呼ばれる人種が抱える原風景を概念化し、現象として世界に上書きする行為。

限りなく簡潔に述べれば、それが魔術のメカニズムである。

だが灰髪の男の言葉通り、思いに反してコーリテイトの魔術は発動しない。

正確には、発動はするが、その効力の大部分を減殺されてしまうようだつた。

「……成程、どうやら君等が『民間防衛機構』^{ハローム}の人間であることは本当みたいだね。それも貴重な戦術兵たる？虚人？のお出ましとは恐れ入つたよ」

同時に、疑問も一つ湧き上がる。

今コーリテイトが口にした通り、俗に？虚人？と呼ばれる彼等は、対魔術師戦闘において欠かすことの出来ない戦力であり、しかしその絶対数は魔術師達より格段に少ない。文字通りに希少かつ貴重な切り札というわけだ。

彼等？虚人？が貴重とされる理由はただ一つ。その、魔術による

世界の改編を滅殺する能力にある。

そんな、所謂魔術師の天敵が、目の前に三人。

確かめてはいないが、恐らくはエティカも彼等と同類なのだろう。いくらステルシアが良家のご令嬢だとしても、護衛に？虚人？が四人というのは有り得ない。海上都市アトレー^タは人口二百五十万を超える町だ。通常の比率で考えるなら、十人で妥当。十五人集まれば他所の町から多過ぎると非難されてもおかしくない数である。

それが、ただ一人の人間のために、四人。

ユーリティートはステルシアを思い出す。今は姿が見えないが、灯台の外で彼等が戻るのを待つてゐるのか、或いはもう帰路に就いたか。

黒い髪と、銀のちらつく青い瞳。その瞳を除けば取り立てて目立つ要素はないが、年相応に愛らしい少女ではあった。確かに言動は少しばかり違和感の残るものではあったが、ユーリティートはその点、他人のことをどうこう言える立場にはないと自認している。

ステルシアは、見かけ通りの少女ではないのだろうか。

単なる良家の御令嬢では收まらない事情を抱えているのだろうか。だが、だとしたら『民間防衛機構』にとつてどれほどの価値を持つているというのか。

本当に『教導魔術師団』の魔術師がステルシアを狙つてゐるのか。全ての事情を把握するには、情報が全然足りていない。

「……仕方ないね。敵対する気はないんだけど……少しだけ相手してあげる」

「……大層な台詞だな、小僧」

彼等の纏め役と思しき灰髪の男 サリファンは、握り締めた短剣の切つ先をユーリティートへ向ける。

年齢相応に染まつた灰色の短髪と、内心を読ませない無表情。正眼に構えた短剣は揺るがず、重心も読ませない。その立ち振る舞いや年齢から考えられる実戦経験は、五年、十年では足りないだろう。いかに？虚人？とはいへ、魔術師を相手に戦い続けてそれだけの

年月を生き延びたという事実は驚嘆に値する。

楽な相手ではないだろう、とコーリテイトは冷静に分析する。

コーリテイトの目的は、彼等に敵対するつもりはないと証明することと、ステルシアを取り巻く事情についての情報だ。

せめて、何が起ころうとしているのかくらい知つておきたい。出来ることなら関わりたくないというのが本心ではあるが、では今すぐ逃げ出すことが出来るのかと自らの心に問えば、返答に詰まってしまうのもまた事実。

何故かなど、考えるまでもない。

もしこの件に、本当に『教導魔術師団』が関わっているならば、放置して好転することなど何もない。恐らく多くの無関係な人間が巻き込まれてしまうだろつ。

そんな事態に陥るのを、黙つて見過ごすわけにはいかない。

そうなれば、師に顔向keが出来ないからだ。

同時に、もう尋ね人にさえ意味はなくなる。

そして何より、これまでの人生を否定することにも繋がる。だから、コーリテイトにとってそれは譲れない一線だつた。

「やるよ、ベル」

コーリテイトの呟きに呼応するように、繫がれた右手を解いたストリベルは一步前進し、左腕を水平に持ち上げる。ズタズタの袖から覗いたその腕に、男達は息を呑む。

そこにあつたのは、黒い金属によつて構成された鎧のよつな義手だつた。生身の腕よりは幾分太く、鎧を纏つているにしては少々細い。普段は袖の下に隠れて見えないが、直立している状態では恐らく指先が膝にまで届く長さだ。

まだ幼いストリベルの身体から繫がるそれは、どうしても見る者に痛ましい印象を与える。

「 忍ぶ闇を隔て、我が敵を裂き、寄る辺なき孤高を誇れ。盾の如き剣を飾り、天鎧の端に其^{メス}が身を襄せ 『裁断ジメント・ブレイド』より派生、対象に『銀の爪』を展開」

ストリベルが腕を持ち上げると同時に、無骨な金属の指先をユーリティートは優しく撫でた。するとその掌を追つて、虚空から湧き出すように、獸が爪を現すように、曇り一つない白い刃がそれぞれの指の先に顕現を果たす。

それぞれの刃は矮小で、精々が十センチといつたところだ。

実戦で使うには心許なく、黒く輝く鎧義手の放つ重苦しい威圧感の前では、ほとんど装飾としての価値しかないよう見えてしまう。

ただこれだけの改編が、今のユーリティートには精一杯だった。

「……驚いたな、小僧。三人の？虚人？を前にしてそれほどの改編が可能とは？」

「……嘘が下手だね、君は。『干渉強度』も『干渉規模』も『干渉速度』も『干渉深度』も、泣けてくるほど脆弱だつて僕が一番感じてるさ」

ユーリティートの苦笑交じりの台詞に、サリファンは不愉快そうに眉根を寄せた。

魔術師にとっての？虚人？は、言つてしまえば抗菌剤だ。魔術と呼ばれる事象の改編を阻害し、減殺する役割を持つて生まれた、人々にとつての一つの希望。

並の魔術師であれば、一人の？虚人？が相手でも魔術の発動が困難になる。

そう考えると、このユーリティートと名乗る魔術師の力量も知れるというもの。見た目通りの優男ではない、ということなのだろう。驚いたという台詞も、断じて嘘ではないのだ。

サリファンは両隣で銃を構える一人の部下を確認し、まるで緊張感のないその様子に舌打ちを漏らしそうになつた。

サリファンと比べると二人はまだ若いが、実戦経験がないわけではない。

だが歴戦たるサリファンに言わせるなら、二人はまだ「本物の魔術師」を知らない。

先の大戦を知るサリファンにとっては、仕方ないと分かつていて

も悩ましい話であった。

「マルティウリ、アサルダ。お前達は小娘の方を抑えろ」

「　　はつ……」

揃つて威勢のいい返事を返す一人をチラリと見遣り、サリファンは言葉を継ぎ足す。

「見た目に惑わされるな。アレは……お前達がこれまで戦ってきた誰より　強いぞ」

第一章 大灯台の町 第四話

微かながら、息を呑む気配を背中に感じて、サリファンは短剣を軽く振り下ろす。

その短剣の動きに合わせて、灯台内部に数発の銃声が轟いた。次いで、鉄板に釘を打ち付けたような、金属同士の衝突する高音が、銃声の反響を鋭く切り裂く。

「…………！」

驚き、拳銃を構えたまま動きを止める一人と、眉を吊り上げ、一層視線を鋭くするサリファン。その三人の様子から、まさかストリベルが銃撃に直接対処出来るとは思っていなかつたのだろう、とヨーリティトは推察する。

何が起きたか、それ自体は単純なものだ。

ストリベルがその黒い鎧義手で、飛来する銃弾の射線を見切つて遮り、弾き飛ばした。実際のところストリベルにもそのような離れば出来ないが、少なくとも発砲した側の男達はそう認識しただろう。

ヨーリティトにも、ストリベルにも、勿論？リデューサー虚人？達にも、結局人間である以上、発砲された銃弾を目で捉えることなど出来はしないのだ。

確かにストリベルが銃弾を弾いたという事実は存在する。

拳銃を持った二人に對して身体を横に向け、要所を守るように鎧義手を盾にする。そうすることでの、弾丸の多くは鎧義手に着弾し、弾かれる。だが、それでも全てを防ぎ切れるわけでは勿論ない。鎧義手の盾を抜けてストリベル本体に辿り付いた銃弾も、確かに存在していた。

ただ、それ等の弾丸さえもストリベルは弾いてみせた、というだけの話である。

そうして出来た隙を、しかしヨーリティトは黙して見逃す。

ストリベルもまたそれに倣い、腕を下げる直立の姿勢を保つ。

元より、彼等を捩じ伏せることが目的というわけではないのだ。自身に？虚人？に対抗出来る程度の能力があることを理解して貰い、害意がないことを主張すればいい。

本来ならそれも、お互の立場を考えると通用しない手法ではあるだろう。

だが、今は状況が特殊だとユーリテイトは考える。一人の少女のために？虚人？が四人も動いていること自体、前代未聞と言つてい。

ならば、それ相応に特殊な事情があると考え至るのも必然である。エティカとの会話から推測されるよう、四人の？虚人？達が本当に『教導魔術師団』ガルムからステルシアを護衛しているのなら、ユーリテイトのような闖入者に構つて居る余裕など本来ないのではないか、との推測も立とうというものだ。

ユーリテイトが『教導魔術師団』と無関係で交戦の意思がない以上、この戦いにはやはり意味がない。

このまま反撃せずに暫くやり過ごせば、話くらいは聞いてもらえる……かな？

多分に願望の混じつた計画の杜撰さを、ユーリテイトは僅かな苦笑として表す。

その微細な表情の揺らぎを、常にはないほどの警戒を見せるサリファンが捉えた。

「……隙を突くまでもない、というアピールか？」

「言つたでしょ。敵対する意思はないって」

威圧するように低く押し殺した声にも、ユーリテイトはあくまで平静な態度で応じる。

表情を引き締め、アサルダとマルティウリは再び照準をストリベルへと合わせた。サリファンは短剣を眼前に構え、隙を見逃すまいとユーリテイトを睨み付ける。

その張り詰めた空氣に、ユーリテイトは両手を挙げて降参のポー

ズを取つた。だがその表情は相変わらず毒氣のない薄笑いで、まるで自らが立たされている窮地に気付けていないようにも見える。或いは、この程度では窮地と呼べないということだろうか。

「……小僧、悪いが時間はかけられん」

瞬間、ヨーリティートの鼓膜を震わせる一発の銃声。

背後から聞こえたそれと同時に、強烈な衝撃がヨーリティートの背中を襲つた。

バランスを失い前のめりになつたところで、サリファンが短剣を携えて駆け寄つて来るのを視認する。ストリベルを避けてか、弧を描くようなコースを取り、残る一人の男達はサリファンと反対側へ駆け出していた。

ヨーリティートは一步足を踏み出して身体を支え、ついでに背後を一瞥する。螺旋階段の出口で拳銃を構える、エティカの姿がそこにはあつた。

僅か、心苦しそうな表情に見えるのは、ヨーリティートの氣のせいだろうか。

悠長に考える時間は、今は無い。エティカの追撃を、ヨーリティートは地面を転がつて回避する。撃たれたところで貫通されることはないが、痛いものは痛いのだ。

そうして半ば動きを封じられながら、ヨーリティートは視界の隅に残る一人の黒服を捉えた。鎧義手だけでは弾丸を防げぬように散開し、その銃口をストリベルへ向けている。

刹那、最初の銃声と同時にストリベルの足元で地面が爆ぜた。

「！？」

マルティウリがそれを認識した時には、眼前には拳銃を握り締める無骨な鎧義手があつた。思わず漏れそうになつた悲鳴は、ストリベルの不気味な仮面を視界に収めて、引き攣らせた喉で消える。

標的の消失から数瞬、その事態に気付いたアサルダがストリベルへ銃口を動かし、再び地面の爆ぜる音が響き、そして途中で動きを止める。

正確には、止められた。

その拳銃を握るのは、つい先刻まで数メートル向こうにいたはずの、ストリベルの鎧義手。信じ難いその光景に、アサルダは反射的に引き金を引き、鎧義手へ零距離での銃撃を放つ。

ガキン、という金属音が鳴り、そして、それだけだった。

アサルダは拳銃を引くことで鎧義手との隙間を僅かに広げ、そこから零れ落ちる銃弾を目撃した。それは見事に先端の潰れた、鉄屑としか見えない有り様だった。

「

僅か数秒の戦闘を見届け、ユーリティートは自身に迫るサリファンへと意識を戻す。

「余所見とは、随分と余裕だな」

まずは一步後退し、エティカの銃弾を回避。

その反応に驚いた表情を見せながらも、一切の淀みもなく突き出されたサリファンの短剣を、ユーリティートは身体を反らして躊躇。その程度は想定していたのか、サリファンはそのまま短剣を横に薙ぎながら距離を取る。その攻撃をユーリティートもまた後退することで躊躇し、そこに放たれる追撃の銃弾を回避するために更に後退。

短剣での近接攻撃をサリファンが担当し、それをエティカが拳銃で援護する。短剣による攻撃は一撃毎に距離を取りながらのヒットアンドアウォー。銃撃の援護と合わせて一つのサイクルとし、それが剣筋や銃撃のポイント、タイミングを変えながら何度も繰り返される。

灯台の中はそれほど広くもないし、逃げ回ったところで拳銃の射程から逃れることは出来ない。終わらない回避サイクルを消化しながら、ユーリティートはいかにしてこの無益な戦闘を終わらせるかを考える。

だが、先に足を止めたのはサリファンの方だった。ユーリティートもエティカも、突然攻撃をやめたサリファンを訝しく思い、示し合わせたように動きを止める。

「……その袋には武器が入ってるのではないか。この局面で何故それを抜かない？」

サリファンの視線が捉えるのは、コーリテイトの右手に握られた黒い布袋だ。確かにその中には、短剣を相手取るに相応しいといえるだろう、一振りの刀が収められている。

「……敵対はしないって、言つてるはずなんだけど」

「…………この期に及んで、まだそんな戯言を抜かすか」

言いながら、サリファンは何気ない動作で腰の後ろから拳銃を抜いた。

「――！」

次いで、発砲。

足元を抉った弾丸に、コーリテイトは反射的に後方へ跳躍する。直接弾丸を当てても戦果が得られない故の、威嚇としての一撃だ。コーリテイトを動かすことが出来たところ、それは十分に役目を果たしたと言える。

発砲と同時に駆け出したサリファンは、右手に握った短剣の右突きを左胸に当てる。切っ先はコーリテイトを捉えた、攻撃速度を重視した突きの構えだ。

「これは、まずいね。

突然のことに不意を突かれて後れを取つたコーリテイトは、相手との距離や自身の体勢を鑑みて回避が難しいことを認識する。最初の突きはどうにか躱すことも出来るだろうが、その後に続くであろう斬撃を回避するのは、このままでは難しい。

長く実戦を離れていたせいで、どうやら勘が鈍っているようだとコーリテイトは内心で歯噛みする。数ヶ月程度のリハビリでは、そういうそうかつての勘は取り戻せないらしい。

サリファンの攻撃を回避出来ないなら、取れる選択肢は二つだけ。大人しく斬られるか、回避する以外の方法で抗うか。

選択するまでもなく、考えるまでもなく、頭で答えを出すよりも早く、コーリテイトの左手は動いていた。

刀の入った袋を持つのは右手で、つまり左手は無手の状態である。閉じられた布袋の封を解いていては、とてもじゃないが間に合わない。

短剣をこの刀袋で受け止めるという選択肢は、意志の力で捩じ伏せる。

ならば、他に採れる手段はない。

「なつ　　！」

サリファンとエティカは目を丸くして言葉を失う。

その視線の先では、何一つ切り裂くことなく受け止められた短剣が、血の一滴も流していないユーリティの左手に握られていた。

無論、その刃をだ。

その光景に驚くこと数瞬。

優秀とも言える立ち直りの早さは、やはり歴戦の猛者といったところだろうか。

サリファンは短剣から手を離すと潔く身を引き、エティカが続けざまに発砲してそれを援護する。ユーリティはその銃弾の回避に動きを制限され、その間に五メートル近い距離を稼いだサリファンは、腰の後ろから抜いた拳銃を構えてユーリティを睨みつける。

その様子を見ていたらしいマルティウリとアサルダの両名も、潰された拳銃を握り締めたまま、一旦サリファンの近くへと下がる。そんな一人を追うこともせず、ストリベルは人形のように直立している。

「……小僧、貴様は何者だ。四人もの？虚人？の前で傀儡を動かし、武器を顯現させ、銃弾を防ぎ、拳銃刃物を素手で掴むなど……有り得ぬ。何故それほどの魔術が使える？」

警戒心も敵意も剥き出しにして、サリファンは静かな激情に浸した言葉で問い合わせる。

その唸るような声に耳を傾けながら、ユーリティは内心でまだ戦意を失っていないサリファンに感嘆の念を抱いていた。サリファンがどんな人生を歩んできたか知らないが、それなりに死線を潜り

抜けてきたらしいことは想像に難くない。

だからこそ、厄介でもある。

余裕ぶつて振る舞つてはいるが、さすがに四人もの？虚人？を前にして魔術を行使し続けるのはコーリテイトにも荷が重い。

発現する魔術の貧弱さを考えても、割に合わないというものだ。

事情を訊き出すのは諦めて逃げるべきか。

コーリテイトがそう考え始めた時、不意に金属の軋むような音が聞こえた。

新手かと、その音源 大灯台の入口に視線を向けると、重厚な木材を鉄で縁取った両開きの扉を開けて、灯台を離れたはずのステルシアが目を丸くして突っ立っていた。

その隣には、銃身の長い狙撃銃を担ぎ、厚手の黒いコートを着た女性の姿がある。煙草を咥え、鳶色の髪を背中あたりで結わえた、黒い瞳をした妙齢の女性だ。

状況から推測するなら、その女性もまた？虚人？なのだろう。

そう考へ至つてしまつと、さしものコーリテイトとて呆れて物も言えない。

この狙撃銃を担いだ女性が？虚人？だと仮定するならば、この町にいるであろう？虚人？の半分がこの場所に集つているということになる。大陸中の注目する祭りが始まるといつのに、治安維持に関しては問題ないのだろうか。

そこまで考へて、自分が悩んでも仕方がないと、コーリテイトは気にしないことにした。

ステルシアと鳶色の髪の女性を確認し、灯台内の？虚人？達は決まりが悪そうな顔で咄嗟に構えた銃を下ろす。

そんな様子に見向きもせず、ステルシアの視線はコーリテイトとストリベルを捉えていた。

「コーリ、どうしたの？」

不安そうな視線がサリファンに移り、非難するよつた眼差しへと変化する。

歴戦の猛者は年端もいかない少女から視線を逸らし、気まずそうにその視線を彷徨わせる。

「遅いから様子を見に来たら……これは、ど「うこ「う」となの？」

その問いに、答える声はない。

「……誰か、説明してよ」

絞り出すようなステルシアの声に、コーリテイトは「同感だ」と

内心で呟いた。

第一章 大灯台の町 第四話（後書き）

次回より次章へ移ります。
誤字・脱字等ございましたら、ご報告をお願いします。

第一章　？大蛇遣い？ 第一話

曰く、ステルシアは最近までラモネアの孤児院にいたらしい。曰く、ステルシアの親類が『民間防衛機構^{クロム}』の重役にいるらしい。曰く、今はその親類がいる、迷宮大都ブルーウェルへの移動中らしい。

昨日、大灯台内部での一幕がステルシアの介入でとりあえずの收拾を見たあと、事情を問うたユーリティトにエティカが告げたのが、先の内容だつた。

因みに『教導魔術師団^{ガルム}』の襲撃については詳細不明だという。ラモネアで一度襲撃を受けているらしく、次の襲撃を警戒していたという話だ。

それが、大陸の入口たるこのアトレー^タに到着して、ブルーウェルの本部と移送の段取りのための通信をしてる間に、見るからに魔術師の格好をしたユーリティトとステルシアが接触してしまつた、というのが戦闘に^{もつ}縛れた発端なのだという。

ステルシアにとつては初めて訪れるアトレー^タであるから、休憩がてら大灯台の見学を許していた、その矢先の出来事だつたらしい。ユーリティトからしてみれば、随分と傍迷惑な話である。

さておき、彼女等にしてみればユーリティトは正体不明の魔術師だ。

状況も状況なだけに、警戒しない道理はない。

『……と、これが私達側の大まかな事情です』

『……そう、なんだ』

結論から言えば、どうしようもなく胡散臭い。

だが、それ以上に気になることが一つ。

それが、今こうして隣を歩いているステルシアのことだった。
「すつごいねえ、高いよねえ」

無邪気な笑顔を見せ、ステルシアはくるくると回りながらユーリ

ティトの先を歩いている。見るもの全てが珍しいと言わんばかりの振る舞いに、ユーリティトは苦笑を隠せないでいた。ストリベルは今日も変わらず、ただ黙してユーリティトの左手を握つてその隣を歩いている。そしてそのユーリティトの様子を、並び歩くエティカは未だ警戒の残る視線で見詰めている。

四人が歩くのは、大灯台へ向かう山道だ。

その道程はここ数日の積雪で白く染まり、最低限の舗装しかされていない山道は最早その境界さえ地形から推測しないと分からぬ状態だ。

空は暗く、道は歩き難く、何より寒いの三重苦。

大灯台へ続く道に四人以外の人影はなく、振り返つて見下ろせば町中に眩しいほどの光が溢れている。手を翳せば、熱氣さえ感じ取れそうだ。

灯台祭の幕が上がり、盛大な賑わいを見せる町を背にして、流刑地へ向かう囚人を思わせる鈍い足取りで、雪の上に足跡を残して行く四人。

自分はこんなところで一体何をしているのだ？

そんな思いを、ユーリティトは無理矢理心の中に押し込む。

+

「灯台つて二つあるんだよね。私、もう一つの方も行つてみたいなあ」

事の発端は、ステルシアのそんな発言だった。

東方大灯台からの帰り道。

前後を？虚人？に挟まれて、ユーリティトと並んで歩きながら、ステルシアはそんなことを言い出した。

「こっちの灯台つて、なんとか、はんどり……だけ。そっちが見えるんだよね？」

「独立共和国アンドーラ、だね。……まあ、この雪じゃ見える

ものも見えないけど」

そう言つてユーリティートは立ち止まり、雪の舞う空を見上げる。手を繋いでいるストリベルも当然立ち止まり、その動きに釣られてステルシアも足を止め、空を見上げた。

突然足を止めた三人に？虚人？達は過剰なほど警戒を見せた。流石に拳銃を抜くまではなかつたが、いつでも取り出せる体勢でユーリティートを正面に捉える。

その様子に気付いて、ユーリティートは「別に暴れないって」と苦笑する。

「……雪、止まないかなあ」

その咳きに、ユーリティートはステルシアを見遣る。
アトレータに降り始めたこの雪は、降り始めてもうすぐ一週間といつたところ。晴れの日が恋しく思えてきてもおかしくない頃合いだろうか。

「……ステルシアは、雪が嫌い？」

「んーん……違うけど、でも、もうずっと……ずっと雪ばかりだか
ら」

そう言つて、ステルシアは少しだけ弱々しげな笑みを浮かべる。

「…………もしかして、ラモネアに？」

「うん、この間まで向こうにいたの」

「…………そう、なんだ」

「この情報を、どう捉えるべきだろうか。

ラモネアからアトレータへ移行した異常気象と、同時期に渡ってきたステルシア。

そのステルシアを追つているといつ『教導魔術師団』と、魔術によるこの常雪と。

そして極め付けは、里子の移送のためだけに五人の？虚人？を登用する異例さ。

突飛過ぎるとは思うし、考え過ぎかとも勿論思つ。

それでも、状況は嘘を吐かない。

「だから、や。もつ一つの灯台からなら、ラモネアが見えるかも、だよね？」

「あ、うん……そうだね」

ステルシアは曇空を見上げる視線を灯台へ移す。その横顔がどこか寂しそうに見えたのは、多分コーリテイトの氣のせいではないのだろう。

だがコーリテイトは、ステルシアのことはほとんど何も知らない。どこまで踏み込んでいいのかも分からない。

魔術師にとって、心とは何より深くその人を表現するものだ。

故に、身勝手にその心に踏み込む行為を、コーリテイトは躊躇つてしまつ。

「コーリの言つてたやることって、何？」

「え、あ……何がかな」

物憂げな表情から一変したステルシアの笑顔に、コーリテイトは不意を突かれて言葉を詰まらせる。

「あ、し、た、だよ。何か用事があるんでしょ？ それって、明日じゃなきゃダメ？」

「ああ、それは……急ぎの用、というわけでもないよ」

どこにいるのか、そもそもその存在さえ定かではない捜し人よりも、今のコーリテイトにはこの目の前の少女の方が気になつていた。正確には、少女 ステルシアの抱える事情と周囲の状況が、だが。

知らない振りをして通り過ぎれば、何か取り返しのつかないような事態を招くような予感がそこにはあった。

それはステルシアがどうと言つより、あの『教導魔術師団』が関わっているという事情が大きく絡んでいるのだが。

「良かつたつ、それじゃ明日付き合つてよ。もう一つの灯台に行きたいの」

「ス、ステルシア様つ」

さすがにこれ以上話が進むのはまずいと思つたのか、漸くエティ

力が口を挟む。最初にユーリティートが感じたような、固い印象はそこにはない。もしかすると、あれは意識して作り上げた仕事用の人格だったのだろうか、とユーリティートは漠然と思った。

「あ、エティカも来る？」

「……つ、そういう意味じゃありませんっ！！」

本来は主従に近い関係なのかもしれないが、その光景はまるで仲のいい姉妹のようだつた。楽しげに笑うステルシアと、顔を赤くして叫ぶエティカの姿に、ユーリティートは自覚しないままその表情を柔らかくする。

「とにかく危険です！！ 禁止ですっ！！ いつまた『教導魔術師団』の魔術師が襲つて来るか分からないんですよ！？ 明日はこれから段取りでサリファンさんもいないし」

そう言つてエティカが指さす先には、何とも微妙な表情でそのやり取りを見守つている灰髪の男の姿があつた。どうやらサリファンという名前らしい、とユーリティートは記憶に書き足す。

「大丈夫だよ、ユーリもいるし。強いんだよね？ 皆、ユーリに負けちゃつたんでしょう？」

「ま、負けてなんか…………つ」

完全に否定し切れなかつたのか、エティカは言い淀んで、ユーリティートを横目に睨む。

その視線を受けて、ユーリティートは巻き込むなと言わんばかりに両手を挙げて降参のポーズ。

その左手にはストリベルの右手が握られたままで、それは何とも間の抜けた姿だつたとか。

そのユーリティートの態度に何を思つたか、エティカはザクザクと雪を踏み締めてユーリティートに詰め寄り、睫毛の数まで数えられそうな至近距離で叫んだ。

「わ、私も同行しますからっ！…」

「あ、うん……そう？」

気持ち後退しながら、ユーリティートは適当な答えを返す。それを

判断するのは自分じゃないだろう、などとは勿論口にはしない。

結局、ステルシアが押し切る形でユーリティートの同行が認められてしまった。因みにユーリティートには意思表明の機会さえ『えられていらない。元々探る気ではあったわけで、ユーリティートとしては好都合と言えなくもないのだが。

とはいっても、全面的な信頼を得たわけでは勿論ない。ユーリティートに対する牽制と周辺の警戒を兼ねて、マルティウリとアリストル狙撃銃を担いだ鳶色の髪の女性だ。二人が適当な距離を置いて四人を監視するという形で話はついた。

面と向かって牽制と言われたことに関しては、ユーリティートも笑うしかなかった。

「と、ここまで話で済んでいれば、まだよかつたのかも知れない。
「ああ、そうだ……ステルシア。一つ聞いておきたいことがあるん
だけど、いいかな」

「ん、なーに？」

一行が再び歩き出してから間もなく、ユーリティートがどこか上機嫌なステルシアへ問い合わせた。これといった反応はないが、サリファンやエティカ辺りは聞き耳を立てていることだろう。聞かれて困る話というわけでもなく、ユーリティートは構わず話を続けた。

「その、襲撃して来た魔術師の特徴とか、教えてくれないかなと思つて」

その質問に対して、ステルシアの反応は不思議そうに首を傾げる。というものがつた。想定外のその反応に、ユーリティートも同じようく首を傾げる。

「私、そんなの見てないよ？」

それは一体、どういう意味だろう。

「…………、えっと……？」

困ったような表情を見せるステルシアから、一いちらもまた困り顔

のエティカへと視線を移す。それから順に、サリファン、マルティウリ、アサルダと視線を移して行くが、浮かべる表情は誰も似たようなものだった。

アリストルだけは何故か挑戦的な微笑みを浮かべているが、これは最初に大灯台に乗り込んできた時から変わらない表情だ。特筆すべき点ではない。

だが、口を噤む？虚人？達の沈黙を破つたのは、アリストルその人だった。

「いやさあ、記憶喪失ってやつだよ。その娘は襲撃のこと、何も覚えちゃいないのさ」

「記憶、喪失…………？」

煙草を揺らして意地の悪そうな微笑みを浮かべるアリストルに、ユーリテイトは少々引き攣った表情で答えた。謎ばかりが増えていく状況に楽しみを見出せるほど、ユーリテイトは酔狂でも好事家でもない。

重く淀んだ溜め息の一つや二つ、漏れたところで仕方のないことだと、ユーリテイトは自身に言い聞かせた。

十

記憶喪失。

ラモネアで受けた『教導魔術師団』の襲撃を、ステルシアは覚えていないという。単純に考えるなら、危機的な状況に陥つたが故の精神的なショックが原因、といったところだろう。

聞けば、その襲撃の折にはエティカ達も居合わせていたらしい。ただ、事前に動きを掴めていなかつたようで、襲撃そのものを防ぐことは出来ず、相応の被害が出たという。煮え滾るような怒りを抑えるエティカの表情から、その被害の程も知れるというものだ。

ステルシアが記憶を失つたのは、そう考えれば救われた部分もあつたのだろうか。

ステルシアの中ではその襲撃事件はなかつたことになつており、しかし失われたはずの記憶の穴を気にしている様子もなかつた。もしかすると、ステルシアの中では事件前後の記憶の整合性が取れるよう、記憶領域において何らかの改編……辻褄合わせが行われているのかも知れない。

孤児院にいたことは勿論ステルシアも覚えているようだし、先にエティカの言つた事情でそこを出て來たことも覚えている。

ただ、襲撃事件だけがなかつたことになつてているのだ。

とはいへ、精神的なショックが原因で記憶を失つているのなら、あえて思い出させることもないのかも知れない。

少なくとも、コーリテイトにはそこまで深く関わる義理もない。

コーリテイトにとつて重要なのは『教導魔術師団』の動向であつて、ステルシアの抱える問題ではないのだ。

「だからそう睨まないでくれると嬉しいんだけどね……」

「……私は、まだ貴方を信用したわけではありませんので」

昨日とは打つて変わり、仕事人間としての人格を取り戻したエティカがツンとした態度でユーリテイトから視線を外す。どこか幼く見えるその挙動に、ユーリテイトは薄く笑う。

「……何がおかしいのですか？」

「いや、うん……何でもないよ」

余程ステルシアを気に入っているのだろう。エティカ本人に聞いたところで、それを肯定する言葉が返ってくるようには思えなかつたが、ユーリテイトには確信に近い直感があった。

あるいはそこに、懐かしい光景を見たのか。

ユーリテイトは判断が下る前に目を閉じる。

「……何が目的か知りませんが、下手な行動は慎むことをお勧めします。アリストルさんは優秀な狙撃手です。その銃口が常に貴方を捉えていること、努力（ゆめゆめ）忘れませんよう

「ははは……、心に留めておくよ」

ユーリテイトが今ここにいるのは、内心はともかく形としてはステルシアのお誘いだ。エティカも勿論それは知っているはずで、だからユーリテイトもあえてそうとは口にしない。理屈ではない、ということなのだろう。

さておき、昨日ユーリテイトの見たアリストルが装備していたのは、長い銃身を持つ狙撃銃だった。そこから放たれる弾丸の威力が拳銃とは比べ物にならないことくらい、ユーリテイトも理解しているのだ。

狙撃手が？虚人？だということを踏まえて考えると、成程無視出来ない脅威である。

自分の置かれている境遇を考え、ユーリテイトは大きな溜め息を吐いた。

人を探してたまたま訪れた町で、気まぐれに大灯台に上つて、偶然少女に話し掛けられて、その少女は『民間防衛機構』重役の里子で、何故か『教導魔術師団』から追われていて、護衛に五人もの？虚人？が付き添い、魔術師である身ながら、今こうして彼女等と行

動を共にしている。

出来過ぎた偶然だと感心すべきか、運のないことだと嘆くべきか。

「ねーえー、早く入ろうよ！！」

一人先を歩いていたステルシアは、大灯台の入口に立つて手を振つていた。

大灯台に上るのが楽しみで仕方ない、と言わんばかりのその振る舞いは、ご令嬢という在り方には程遠い。下手をすれば実年齢以上に幼く見える、市井の少女そのものだ。

「……行こうか。待たせるのも、悪いしね」

「……言われるまでもありません」

苦笑し、コーリテイトはストリベルの手を引いて歩き出す。数歩遅れてその後を追うエティカは、昨日から思つて疑問を一つ、意を決してコーリテイトに問いかけた。

「あの、コーリテイト、……さん」

「……別に無理して敬称なんて付けなくていいよ」

コーリテイトは振り返り、何とも微妙な表情をしたエティカに笑い掛けた。護衛対象たるご令嬢、ステルシアが同行を許したとはいえ、エティカにとつてのコーリテイトは護衛対象に纏わりつく素性不明の魔術師……敵だ。ついでに、見た目の年齢で言えばコーリティトはエティカよりも年下に見える上、既に一度交戦まで果たしている。

敬称を付けて呼ぶことに抵抗を感じるのは、仕方のないことだった。

「……そう、ですか。ではコーリテイト、何故その子は裸足なのでしょうか。いくらその……傀儡とはいって、そのままで立つと思うのですが

「……まあ、そなんだけどね」

ストリベルを傀儡と呼ぶ前に言い淀んだのは、最初に対面した時の脅しが原因だろうかとコーリテイトは考える。ストリベルの正体に対して、詮索しないように釘を刺した時の話だ。

「ご存知の通り、魔術師って人種は命を狙われやすいからね。ストリベルが裸足なのは、咄嗟に魔術を発動させる必要がある時、その方が都合がいいからだよ」

「傀儡が、魔術を……。では、この子はやはり虚構人形…………あエティカの視線の先には、足を止めて振り返るコーリティトの姿がある。そこにはいつも浮かべている薄笑いはなく、一切の感情を取り払ったような無表情があつた。

昨日の展望室で帰り際に呼び止めた時は振り返ることさえしなかつたストリベルも、今はエティカを見上げるように顔を上げている。視線こそ仮面に隠れて見えないが、今のエティカにはそれだけが、この状況にあつて唯一の救いにも思えた。

ストリベルも同じ色なのだろう、コーリティトのその双眸。

淀んだ紅玉のような煉瓦色の瞳には、エティカを戦慄させるだけの何かがあつた。

それは、エティカがこれまで経験してきたどの実戦でも感じたことのない、命を握られたような冷たい感覚。

「好奇心が強いのは結構だけど、詮索は無用だよ。何か思い至ることがあつても、僕としては口にしないことを勧めるね」

「…………」

言葉を返せないエティカを置いて、コーリティトは再び雪道を登り始める。手を繋いだままのストリベルも当然それに続き、ステルシアの急かす声に、心を重くしたままエティカは無理やり足を進めた。

一つの大灯台の基本的な構造は、然程変わりがない。

昨日訪れたファンドーラ側の東方大灯台内部と変わり映えしないホールから、内壁を沿う形で二重に渦巻く螺旋階段の片方を上り、目的地たる展望室へと歩く四人。

先頭を歩くのは、当然の如くステルシアだ。

その後に続くのがコーリティトと、手を繋いだままのストリベル。最後尾を歩くのが、やけに静かになつたエティカだつた。見るからに氣落ちしたその姿に、コーリティトは少し強く言い過ぎたどうかと、少々の罪悪感がないでもなかつたが、先の発言を撤回する気がない以上、自分が慰めるのは筋違いだと静観を決め込んでいる。その様子に気付いたステルシアも、エティカに「どうしたの?」と気遣いを見せていたが、エティカの方はただ機械的に「問題ありません」と繰り返すばかりだ。

視線で問い合わせてくるステルシアにコーリティトは首を振つて答え、どう見ても問題のあるエティカについては、どうせ吐露することはないだろうと放置することになった。

「着いたよーみーんなー。なんか、あっちの灯台と変わらないね！」

展望室へ入るなりそう言ひて、ステルシアは昨日と同様にタツタツタツと窓辺へと駆け寄る。灯台祭の初日であるから、客はないのではないかと考えていたコーリティトだつたが、この展望室から一望出来る景色にはそれなりの評価もあり、昨日よりは客の人数も多いようだつた。

コーリティトは窓辺に張り付くステルシアに近いテーブルを選んで椅子に掛け、その隣の席にストリベルを座らせる。対面には、まだ俯き加減のエティカが腰を下ろす。

「ユーリ、ラモネアはどっちに見える？」

呼ばれて、コーリティトは座つたまま振り返る。

ステルシアは背中を向けて両手を窓に当て、薄暗い外の景色を眺めているようだつた。コーリティトも一帯に視線を向けるが、海の向こうにある大陸は勿論、ラモネアの町の明かりさえ見ることは叶わない。

見えるのはただ、灰色の曇り空と異様に明るいアトレータの町並み。更に言うなら、闇を具現したような海原と右手の視界を遮る切り立つた崖の断面だけだつた。

「……あつちだよ

それでもヨーリティトは、薄暗い闇の向こうを指差してみせる。振り返ってその指示する方向を確認し、ステルシアは再び窓の外を見詰める。

「んー、やっぱり見えないなあ……」

それからステルシアは「あーあーだの「なーんだよー」などと一頻り不満を垂れ流し、それでも展望室からの眺めは気に入っているらしく、展望室の端の方へと窓辺を歩いて離れて行った。

その様子を確認して、ヨーリティトはエティカへと向き直る。その視線を感じてか、エティカはどこか緊張した様子で、それでも気丈にヨーリティトへと視線を合わせた。

「……別に怒つてないから、そんな緊張しなくていいのに」「き、緊張など……！」

エティカは声を張り上げて、ハツと氣付いたようにまた少し俯いてしまう。そんなエティカの反応に、ヨーリティトは苦笑を飲み込んで意識的に真剣な顔を作った。

「……ステルシアのいない内に、聞いておきたいことがあってね」「…………はい、何でしようか」

その真剣な表情にエティカは身を引き締め直し、仕事時の機械的な、よく言えば毅然とした態度でヨーリティトとの対話に臨む。どうにも極端だ、とヨーリティトは感じながら、それも今は好都合だと思い直して話を続けた。

「ラモネアで襲撃してきた『教導魔術師団』の魔術師について、教えてくれないかな？」

第一章　？大蛇遣い？ 第二話

「…………分かりました。お話しします」「う」

エティカは僅踏みするようにコーリテイトを睨み、数秒の沈黙の後に折れた。

こうして行動を共にしている以上、情報の秘匿が得策だとはとても言えない。

「ラモネアに現れた襲撃者は一組の男女でした。女性の方は？大蛇遣い？」の通り名を持つ、推定ですが召喚魔術師、メリーニー・アドラ・フランベルグ。男性の方は？殺戮請負人？の通り名を持つ、こちらも推定ですが武装魔術師、レインドラ・ルイフオン・リヴェンタ。共に『教導魔術師団』に所属して十年に満たない、という情報です」

「十年に満たない……ね。通りで、聞かない名前だ」

呟くようなユーリテイトの台詞はしかし。

「…………何か、仰いましたか？」

幸いエティカには聞こえていないようだった。

「いや、何でもないよ」

「そうですか……では、続けます。まずは？大蛇遣い？メリーニーですが、名前の通り自らが召喚した大蛇を使役する魔術を使うそうです。どの程度までの召喚が可能なのか、詳しいことは分かりませんが……複数の首を持つ三十メートルクラスの大蛇が、現在確認されている中では最大の規模ですね」

「それはまた、大した者だね」

素つ気ないユーリテイトの反応に、エティカは不審を隠さず眉根を寄せた。

「…………然程、驚いてるようには見えませんね。そもそも『教導魔術師団』に与する魔術師は、多くの魔術師達とは比較にならない魔力を持っています。貴方の実力がどれ程のものか測りかねますが、先

の大戦での『教導魔術師団』の威光を知らないわけではありません
でしょ？』

「そうだね……、有名どころくらいは把握してるつもりだけど」

コーリティートの見た目は、エティカよりも若いくらいだ。精々
が十代後半で、生まれた頃には大戦も終結を迎えた頃なのだろうと
推測出来る。

エティカ自身、幼少の時分に終結した大戦については多くを知ら
ない。

だからコーリティートの把握する有名どころの魔術師というのも、
記録に残る情報や伝聞によつて知り得たものなのだろう。人の手に
よつて伝えられる情報は、良くも悪くも捻じ曲げられるもの。強い
と言われたところで実感を持てないのもまた、仕方のないことだつ
た。

押し黙つたエティカに何を思ったのか、コーリティートは溜め息を
吐いて言葉を繋ぐ。

「僕だつて魔術師の端くれだから、有名な魔術師の存在くらい知つ
てるよ。？炎の魔術師？に？羊飼い？に？罪の病？に。後は？夢を
渡る者？に……そうだね、？千里皇女？とか」

それらの通り名は、大戦の時代を知らないエティカでも知つてい
るビッグネームだ。

当代最強と名高い『教導魔術師団』の重鎮たる？炎の魔術師？。
大戦中、最も多くの命を奪つたとされる古き魔術師？羊飼い？。
個の戦力では『教導魔術師団』随一たる快楽殺人者？罪の病？。
中立組織たる『独立魔術師保護協会』を束ねる？夢を渡る者？。
その中立組織の最大戦力として魔術師達を率いた？千里皇女？。

「……それ程無知、というわけではないのですね」

「まあ、それなりには……ね」

「他の有名どころとなると……一睨みで命を奪う？邪眼？。大戦の
英雄と呼ばれる？白刃？に、その相方で、同胞殺しとも揶揄される
？人形師？。後は……存在すら不確か？無明大公？……その辺り
ババツ・マスター

が有名でしょうか」

「……君もほんと、よく知ってるね」

コーリテイトは半ば感心したように、呆けた顔でエティカを見詰める。褒められたのが嬉しかったのか、エティカは視線を浮つかせて口元を意味もなく歪める。

それから思い出したように僅かに目を見開き、咳払いをしてコーリテイトに視線を戻した。

「……話が逸れましたね……。では？殺戮請負人？レインドラの魔術についてですが……」

そこで一度言葉を止めて、エティカは僅かに眉を顰める。何か嫌なものでも思い出したような、そんな嫌悪感が滲み出したような表情だ。

「…………どうかした？」

「…………いえ、大したことでは。レインドラが使う魔術は、端的に言えば血液を操ること、です。魔術師ではない私達には分かりませんが、その血液によって切断や刺突の攻撃が出来ることから考えて、恐らくは血中の鉄分を固めることができるのでしょう」

「血液、か……。物騒というか何というか、あまり見たくない魔術だね」

「…………それについては、同感です」

「ねえねえ、何のお話？」

バシン、とテーブルに両手をついて、いつの間にかテーブルの側へ来ていたステルシアは、エティカとコーリテイトの顔を順に覗き込む。そのままストリベルの対面の席へ腰を下ろし、どこか気まずそうに沈黙を続ける二人をきょろきょろと見比べる。

「んー？ 一人共どしたの？」

ステルシアに話しても問題はないのだろうか、と言う疑問を込めてコーリテイトはエティカを見るが、エティカは何とかしろとでも言わんばかりに、少々強気な視線でジッとコーリテイトを見詰めている。

その視線を受けてどうしたものかとユーリティトは辺りを見回し、展望室の隅に設置された大きな置時計が目に付いた。

「……ああ、そろそろ花火が上がる時間だつて話をね」

打ち上げ花火の開始時間は、午後八時の予定だ。少しばかり針がずれているのか、時計が示す時刻は八時を僅かに過ぎたところ。

不意に。

「…………おっ？」

「ああ、始まつたね」

明るくなつた窓の外を見遣り、そこに虹色の光の線を見た。くるくると回転しながら曇天を虹色に染める、幻想という言葉を表現したかのような灯光の一重奏。

「おわあー、すつごい綺麗だね、これー！」

それは海上都市アトレータの代名詞とも言える、一つの大灯台が示す導きの光。

切り立つ崖を挟んでお互いの雄姿は見えずとも、それぞれの灯光は遙か上空に浮かぶ曇天をスクリーンに交わり、海原で彷徨う無数の船をこの人工の港へと誘う光条。

普段は白く澄んだ灯台の光も、この灯台祭の期間中は色硝子によって虹色に染められる。年に一度だけ、三日間だけの、それは特別な光だ。

「虹色の、光…………きれー…………」

偶然この時期にこの町を訪れ、年に三日間だけのこの光景を目にすることが出来たステルシアは、成程それなりに運がいいのかも知れない。

口を半開きにして窓の外を仰ぐステルシアを見て、ユーリティトはそんなことを思う。

その隣に座るエティカも、そんなステルシアの後ろ姿をどこか柔らかい表情で見守つていて、薄笑いのユーリティトの視線に気付くと、慌てたように澄ましてみせた。

虹色の光に対するステルシアの驚きも冷める頃、まるでタイミン

グを見計らつたように、今度は幾つもの笛を鳴らすよつた音が聞こえた。

「あ、あれっ！－！ 何か昇つてるよつ－！」

ステルシアの見下ろす海原の闇から、幾条もの幽かな光が真つ直ぐな軌跡を残して空へ向かう。その光は中空で消えて、そこに大輪の華を咲かせた。

鮮烈に煌めく紅色に、光彩を焼く眩い金色。

砕け散る翡翠は月を背に輝き、海色の破片が曇天を塗り変える。紫色の散光が空に踊つて、銀色の閃光が舞台を照らし。

そうして雅に夜空を彩る絢爛豪華な光の華々に、ステルシアは目を丸くして、呼吸さえ忘れて見入つていた。

今夜だけは忌々しいこの雪も、幻想の夜を色付けるのに欠かせない一つのピースだ。

開花から数秒遅れで聞こえる轟音が窓を震わせ、ステルシアはどこか落ち着かない様子を見せながらも、視線だけは夜空から離れることがない。

その無垢な幼子のような反応が、ユーリティトには少しだけ悲しく思えた。

恐らくステルシアは、これまで打ち上げ花火を見たことがなかつたのだろう。わざわざ問つまでもなく、この反応を見ていれば想像するのは容易い。

十代も後半に差し掛かる娘が、打ち上げ花火の一つも知らない。どころか、大陸有数の祭典である灯台祭さえ知らなかつたのだ。

「大戦の結果がこれか……」

「ん、何か言つた？」

聞かせるつもりもなかつた咳きに、ステルシアは振り返る。

「…………いや、何でもないよ」

不思議そうに首を傾げて、ステルシアは再び打ち上げ花火へ視線を戻す。

鼓膜を揺らす轟音を差し置いて、ユーリティトの耳に小さな電子

音が届いた。音が鳴った時間は僅か数秒、音源を辿つて見れば携帯電話を片手に立ち上がるエティカがいた。

「アリステルさんです、少し失礼します」

「構わないよ」

席を立つたエティカは、展望室の入口近くまで歩いて携帯電話を頬に当てる。

「ねね、コーリにお願いがあるんだけど」

「お願い？」

どこか浮ついた表情で、咲き止まぬ花火を背にしたステルシアがパチンと両の掌を合わせる。

「私、町に行つてみたい。お店とか、いっぱいあるんだよね？」

「それは、そうだけど……」

町へ降りる許可を下すのは、当然だがコーリテイトではない。

ステルシアの護衛はあくまでエティカ、並びに四人の？虚人？達であつて、コーリテイトやストリーベルは部外者でしかない。

どう答えたものかと悩んでいたところで、電話を終えたエティカがやや強張った表情で戻ってきた。

一体何を話していたのだろうと考えて、コーリテイトは眉根を寄せた。エティカの表情から察するに、吉報でないことは確かである。

「…………アリステルさんから連絡がありました。昨日の……東方大灯台で？大蛇遣い？メルニー二を目撃したとの通報があつたそうです」

「…………例の襲撃者、だね」

「…………はい、これより対象との交戦に入ります」

東方大灯台とはつまり、昨日コーリテイト達が出会つたもう一つの大灯台だ。ラモニアでステルシアを襲撃したという『教導魔術師団』の魔術師が、今このアトレーータに姿を現した。それがつまりどういうことか、意味することとは考えるまでもなく一つだけだ。

「…………君も行くのかな？」

「うん？ エティカどこか行くの？」

わざわざ事情を説明した理由を考えると、コーリテイトにはそれ以外の結論が浮かばない。

「はい、ステルシア様…………相手が相手ですので、仕方ありません。それから、こちらの勝手で申し訳御座いませんが……………」
リティト。暫くステルシア様の護衛を引き受けてもらえませんでしょうか」

第一章　？大蛇遣い？ 第四話

「…………僕が？」

この展開を、ヨーリティトは可能性として考慮していなかつたわけではない。だが、それでも有り得ないと思つてはいたことは事実だ。魔術師であるヨーリティトと、魔術師に抗戦するために組織された『民間防衛機構』と。

元々が敵対する立場にあり、両者の間には埋めよづのない確執が存在している。

出会い頭に襲撃を受けた昨日の対応こそが、その確執の深さを表しているというのだ。穏やかでないその関係性は、先の大戦における双方の対立という、組織の成り立ちに起因する。

「…………正氣かい？」

だからヨーリティトが不審を感じるのも、無理なからぬことである。

そして表情を見る限り、エティカにもそれに近い感情があるのだろづ。

「アリストルさんの…………指揮官の命令ですのです」

「指揮官つて……サリファンつて男じやなかつたの？」

「サリファンさんは副官ですので。アリストルさんはその…………あまり真面目ではないと言ひますか……少々、奔放に過ぎるきらいがありますので……」

直属の上司に対する批判に気まずさを感じてか、エティカは不機嫌そうな表情を見せながら少々頬を引き攣らせる。視線が余所を彷徨つている辺りは『愛嬌』というところだろうか。

指揮官という立場でありながら魔術師に護衛対象を預ける行為を、奔放といつ言葉で片付けていいのだろうかと思いながら、結局ヨーリティトはその言葉を呑み込んだ。

わざわざ話をこじれさせる理由もない。

「……ま、僕は構わないけど」

想定していたよりも簡単に引き受けたことが、エティカに
とつては逆に不安材料になり得る。変わらない薄笑いも、その下に
見え隠れする魔術師としての顔も、目的の知れないその言動も、何
もかもがコーリテイトに対する信用を妨げる要因でしかない。

「……ステルシア様にもしもの事があつた時は……」「
「そうならないよう、戦いに行くんでしょ？」

苦笑交じりのコーリテイトと。

「もしもつてなーに？」

と、事態を今一つ理解していないステルシア。

「……そう、でしたね」

エティカは心配そうにステルシアを見詰め、物言いたそうな視線
をユーリテイトに送り、数歩遠慮した眼差しでストリベルを見遣り、
それから取り繕つた無表情で溜め息を一つ。
結局のところ、悩んでいる時間はないのだ。

「……それでは、ステルシア様をよろしくお願ひ致します」

「……ああ、分かったよ」

エティカは渋々、といった感情を隠そつともせず、頭を下げて展望室を後にした。

+

白く染まつた山道を下つて切り立つた崖の麓へ走り、十字路の対面へ続くもう一本の山道へ。その先にあるのは、昨日も訪れたファンドーラを臨む東方大灯台だ。

山道を覆う雪には、無数の足跡がまだ消えずに残つていて。

ただ、争つた形跡は見受けられない。エティカにとつてはそれだけが救いだった。

いかに対魔術師戦闘の申し子たる？虚人？といえど、身体能力にリティーサー

おいては人としての限界を超えない。それでも大灯台間の三キロ、それも雪の積もった山道を十分足らずで駆け抜けて息を切らすこともないエティカは、やはり一般人とは作りが違う。

辿り着いた東方大灯台は、入口の大きな扉に改修工事中の表示が掛かっていた。それはサリファンの手回しによる、昨日の戦闘で刻まれた銃痕を処理するための措置である。

だから周囲に人気はなく、絶えず聞こえてくる銃声や、得体の知れない破碎音を一般の人間に知られることもない。

エティカは腰の後ろに隠した拳銃を抜き、音を殺して大灯台の扉へ寄り掛かった。重厚な木製の扉を震わせる震動が、背中を伝つて精神を昂らせて行く。

コンクリートが碎けるような、一際大きな破碎音が灯台の奥の方から聞こえて、エティカは半ば急かされるように扉に体重をかけて内部を覗き込む。

「来たかエティカ」

「アリストルさん」

入口のすぐ側には、狙撃銃を構えたアリストルが立っていた。

灯台の中へ足を踏み入れてアリストルの隣に並び、その重厚な扉を閉じる。そうして状況を確認すべく見渡した大灯台内部の惨状は、エティカの目にも相當に無残な様相を呈している。

石の敷板は剥がれて砕け、壁は無数の銃弾に穿たれ、螺旋階段は半ばで崩れ落ち、そしてそれらを埋め尽くすように、縦横に走る削剥の跡。

その中心に立つのは、白い浴衣の上に薄紅の羽織を纏つた妙齢の女性だつた。

落ち着き払つた物腰と、どこかで見たような薄笑い。白い雨傘の下には喜色の混じつた茶色の瞳と艶やかな栗色の長髪が流れおり、いつそ不気味とも言えるほどの優美な立ち姿には、どこか浮世離れした魅力があつた。

例えばここがどこかの邸宅だったなら、この女性も違和感なくそ

の風景に収まるのだろうか。そう考へると、エティカも何か訣然としないものを感じてしまう。

何故なら、今この女性 メルニーの周囲にあるのは高価な調度品でもなければ優れた美術品でもない。

美しく微笑むメルニーの足元には、白く濁つた大蛇の鱗。全長にして、恐らくは二十メートルを超える蛇の巨体だ。

それはメルニーを守るようにぐるを巻き、地上三メートル近くには人の頭など一呑みに出来そうなほどの大口を持った蛇の頭。召喚魔術師？大蛇遣い？の行使する、化身系召喚魔術『大蛇の王ヨルムンガンド』の発現である。

「あら……また増えましたの。よろしいのですか、私一人に？虚人？が五人も……私が一人でないことは、ご存知のはずですが？」まるで危機感を感じさせないか細い声で？大蛇遣い？は泰然と微笑んだ。

「心配は無用さ……ちゃんと手は打つてある。向こうに仕掛けようもんなら、あんた達みたいな若い魔術師なんぞ、一捻りつてところだな」

「……それは興味深い話ですね」

アリストルの不敵な言動にも、メルニーはその余裕を崩さない。逆に調子を崩されたのは、隣に立つエティカの方だった。今の言葉を聞く限りでは、アリストルはえらくユーリティートの力を評価しているように思える。

「アリストルさん……ユーリティートと知り合いだつたんですか？」

「面白い冗談だな、エティカ。魔術師の知り合いなんて、あたしにいるわけないだろ？」

「……それはまあ、そうですね」

ただのはつたりか、とエティカは内心呆れ、それでも対峙した時に感じたユーリティートの圧力を思い出して、とりあえずは抗議を呑み込む。

「それによ、そんなに不安なら早いとここいつを片付けちゃえばいい

いだけの話さあ？」

そう言つて、アリストルは狙撃銃の銃口をメルニーーへ向ける。『大蛇の王』の巨体がその射線を遮るように蠢き、その動きに呼応するように、マルティウリとアサルダが拳銃を構え、サリファンが短剣を握り直す。

それぞれの配置を確認し、エティカはアリストルから少し離れて拳銃を握り締める。

「……まったく、理解に苦しみますわね。そこまでして、あの娘を守る意味が貴女方にあるのでしょうか？」

四つの銃口に狙われてなお、メルニーーは態度を変えない。撃たれても防ぎ切る自信があるのか、あるいは躲す自信があるのか。ラモネアでの襲撃においては逃げに徹し、また攻撃を仕掛けてきたのもレインドラだけであつたため、エティカはメルニーーが戦うところをまだ見たことがない。

召喚された『大蛇の王』でさえ、実物を見るのは初めてだつた。「さあてねえ、こちどらお役所仕事なもんでさ」

「……哀れなものです」

そう言つて、メルニーーは右手を前に伸ばす。その動きの意図を解さないまま、アリストルは狙撃銃を発砲し、その銃声に続いてエティカ達三人の拳銃が轟音を鳴らした。

僅か数秒の内に押し寄せた十数発の弾丸はしかし、ただの一発もメルニーーは届かない。拳銃の弾丸は濁つた鱗を割つて僅かに肉を抉るに止まり、その三倍近い初速を誇る狙撃銃の弾丸さえ、『大蛇の王』の額を穿ちこそするも、貫通するには至らない。

魔術によつて顕現した『大蛇の王』に、通常の生物の常識など当てはまるはずもなく、銃創程度のダメージでは『大蛇の王』の動きもほとんど阻害することは出来ない。

「…………我が身を焦がす毒を以て、討ち滅ぼす牙と成せ　　『制バ
ジリスト
眼の蛇』」

銃撃の止むその僅かな間隙を突いて、メルニーーは薄く笑いながら

ら伸ばした右腕を振り上げる。その動きに合わせて、周囲で新たに三匹の蛇が顕現する。

化身系召喚魔術『制眼の蛇』は、『大蛇の王』と並ぶメル二ー二の主力魔術である。後者が防御能力に主眼を置いた蛇なら、前者は攻撃能力に主眼を置いた蛇と言える。

メル二ー二を中心に据えてどぐろを巻く『大蛇の王』ほどではないが、それでもその三匹の『制眼の蛇』はそれぞれが二メートルに近い全長を持つていた。

「…………、こいつは笑えねえ」

これまで調子を変えることのなかつたアリストルも、言葉を詰まらせ、頬を引き攣らせる。

俗に『魔力』と呼ばれる魔術師の力量を示す単語は、これもまた俗稱でしかないのだが『魔法干渉能力』の略称とされ、それは『干渉強度』『干渉規模』『干渉速度』『干渉深度』の四つの要素によって成り立っている。

魔術師でないアリストル達には理解の及ばない領域ではあるが、魔術や魔法と呼ばれる異能の正体は、つまるところ世界を構成する情報の改編だ。

全ての人が持つ心の中には、それぞれの存在を体現する風景がある。

夢よりも確たる姿を持ち、空想よりも現実に近い、思想や経験に基づいて形成された多様な概念を内包する、原風景や心象風景と呼ばれるそれだ。

心に根付いたその風景を彩り、形作る概念は、世界の構成情報を記録する階層　深層意識層における第三階層『虚構世界』　に潜る自我に引き摺られてそこに融和する。

そして『虚構世界』に融和した概念は、世界の構成情報を変質を齎し、そうして改編された事象は『現実世界』に反映される。

纏めてしまえば、『現実世界』の構成情報を各々が心の内に持つ心象風景に似せて書き換える力を『魔法干渉能力』と呼び、その改

編といつ働きは『事象改編作用』と呼ばれている。

その一つを合わせた呼称こそが魔術であり、それは『干渉強度』『干渉規模』『干渉速度』『干渉深度』の四つの要素によつて傾向が評価される、といつわけである。

アリストルの知る『大蛇遣い』メル二ーーは、主に『干渉強度』に優れた魔術師だ。故に、メル二ーーの魔術たる『大蛇の王』は銃弾にも耐え得る強度を持つてそこに在る。

逆説『干渉規模』に優れないがために大蛇の召喚は広範囲に及ばず、『干渉速度』に優れないがために召喚には数秒とはいえ時間を要し、『干渉深度』に優れないがためにメル二ーーの抱える概念は大蛇の外へと広がることがない。

だから、現在の『教導魔術師団』メンバーの中では、メル二ーーは比較的戦いやすい敵と言えた。

所構わぬ広範囲に爆炎を撒き散らす？炎の魔術師？よりも、殺しても死なない群狼を統べる？羊飼い？よりも、撲理や法則を無視して巨大な鎌を振り回す？罪の病？よりも、ただ巨大な蛇を召喚するだけの相手の方がずっとましである。

あくまでましであつて、それでも十分に強敵であることは変わらないのだが。

二十メートルの『大蛇の王』を囲む、三メートルの『制眼の蛇』が三匹。自然、アリストル達の包囲網は広がり、壁際へ押し退けられる形になる。

「今なら、見逃して差し上げてもよろしいのですよ？」
「……どういう意味だそりや？」

アリストルの問いに、メル二ーーは微笑むばかりで答えない。

第一章　？大蛇遣い？ 第五話

「……慈悲のつもりか？」

「どう捉えて貰つても構いませんよ」

今この場所に、ステルシアはいない。だからメルニー側にはわざわざ戦う意味がない。つまり、ここで逃がしてアリストル達がステルシアと合流したところで、アリストル達の存在など護衛としても無意味だということ。

簡潔に言えば、眼中がないということだ。

アリストルは、メルニーの台詞をそう解釈した。

「……悪いが、あんたには今日死んでもらう」

「出来ますかね、貴女方如きに。悪名高い？虚人リテューサ？の魔術減殺能力も、所詮はこの程度。期待外れもいいところですね」

弱冠の落胆を滲ませて、メルニーは溜め息を一つ。

その反応にも眉一つ動かさず、アリストルはメルニーを睨み続ける。

「勝手に期待を押し付けといて溜め息とは、いいご身分だな」

言いながら、アリストルは狙撃銃のボルトハンドルを引き、空になつた薬莢を排出させる。新たな弾丸を装填しながら、アリストルは四人の？虚人？達を流し見て現状を確認。

「ハニー、ヴァル両名はあたしと共に？大蛇遣いサーベント・サマナー？の討伐を。エティカ、サリー両名は周囲の蛇からあたし達を護衛。深追いはするな。可能なら討て」

「「「「了解」」」

最初に動いたのはエティカと、サリーことサリファン・リヴォル・トトリスの二人だった。

それぞれの手に拳銃と短剣を握り、手近な《制眼の蛇》へと攻撃を仕掛ける。

短剣の一振りは蛇の胴を両断し、拳銃の弾丸は蛇の胴を貫通し、

一人は暴れ狂う蛇を引き連れてアリストルから距離を取る。

そうして拓かれた空間を抜け、マルティウリとアサルダは『大蛇の王』^{ヨルムンガンド}へと接近する。その後を追うようにして、アリストルは悠々と『大蛇の王』の前へと歩み出る。

鎌首を擡げた『大蛇の王』の頭部は、アリストルの遙か頭上。

マルニーニの盾たる『大蛇の王』が術者の傍を離れるとは考え難いが、警戒しておくことに越したことはない。アリストルは目測で間合いを測り、目立つた動きを見せない『大蛇の王』から一定以上の距離を保つたまま狙撃銃を構える。

左右から攻撃の隙を窺うマルティウリとアサルダに、大胆にも正面に立つアリストル。

これが？虚人？の持つ魔術減殺能力、ですか。強がってはみましたが、正直これは想定外……ですね。現時点での魔力も、恐らくは普段の三割弱、といったところでしょうか。

それ等の事情故に、マルニーニは動きを極端に制限されている。銃撃を防ぐために周囲を『大蛇の王』で固め、狙撃銃への対策として、最も硬い部位である額の向きを制限され、攻勢に出ることもままならない。

この状況を打破するためにと新たに召喚された『制眼の蛇』も、いくら攻撃能力に特化した個体とはいえ、短剣や拳銃による攻撃にさえ耐え切れないものである。

癪ではありますが、一度撤退するのが得策……でしょうか。意地や矜持で命は買えない。戦場ではいかに早く、的確な判断を下せるかが命運を分ける、とマルニーニは経験から学んでいる。

チラリと目を配れば、灯台の壁際には奮闘するエティカとサリファン、そして二人と対峙する『制眼の蛇』の姿があった。

エティカの銃弾は的確に蛇の頭を捉え、所々に弾丸が食い込んでいるのが見えた。

サリファンの短剣は蛇の死角から薙がれ、尾から頭にかけて幾つもの断面を作る。

だが、二人も流石に無傷ではないらしい。その巨大な顎に並ぶ毒牙こそ今だ防ぎ切つてはいるが、時折掠める蛇身の質量攻撃は、表皮の鱗と合わせあって、衣服を破いて幾つもの擦過傷を作っていた。全身を確認することは出来ないが、打撲傷も決して少なくはないはずである。

召喚した《制眼の蛇》は三匹で、エティカとサリファンの相手にそれぞれ一匹ずつを配置しているということは、まだ一匹残っているということである。

まずは退路を確保しましょう。

メルニーの意志のままに、控えていた《制眼の蛇》が砕けた石畳の上を這いずり出す。メルニーを囲う《大蛇の王》の脇を抜け、警戒して距離を開いたアリストルを顧みることもなく、その際に被弾した狙撃銃による攻撃にも怯むことはなく、やがて門へと辿り付く。

「ちッ、一体何を……ツ」

そして勢いのまま《制眼の蛇》は地面を跳ね、分厚い門扉へとその巨体をぶつけた。鞭のように撓つた蛇身の一撃は、総重量百キロを超える一枚の扉を灯台の外へと弾き飛ばす。

その代償として、身体の大半が潰れてしまつた《制眼の蛇》の惨状に、メルニーは内心で歯噛みした。通常の環境下であれば、精々鱗の一部を犠牲にする程度で済んだことだろう。

扉と一緒に灯台の外へと飛び出した《制眼の蛇》は、しかしそれきり動くことはなかつた。その蛇身は降り注ぐ雪に埋もれながら徐々に形を崩し、やがて完全に消失する。

耐久値の限界を超えたが故の、それは必然たる帰結だった。

まさか逃げようつてのか？

思つて、アリストルは開かれた門からメルニーへと視線を移す。相対する《大蛇の王》は、先刻よりも幾分頭を低くしていた。それはつまり、接地面積が増えたということだ。

「ハニー、ヴァル、蛇の頭を狙え！－」

アリストルの怒号に、名前を呼ばれた二人 マルティウリ・レクト・ハニスとアサルダ・ダリエ・ヴァレンタムの二人は、構えた銃を『大蛇の王』の頭へ向ける。

同時に、発砲。

「撃ち続けれ！！」

短い指令を発し、アリストルは地面を蹴った。

それまでアリストルに対する牽制の役割を担っていた『大蛇の王』は、その局所的な弾丸の雨に、紙束を破く音に似た耳障りな鳴き声を上げる。巨体を捩じらせ、なんとか執拗な弾丸の雨から抜け出そうともがくも、メルニーーの護衛という行動制限がある以上持ち場を離れて敵に喰らい付くことも出来ず、ただただ撃たれるがままといった様子だった。

流石に、場慣れしているようですね……。

アリストルの指示した戦法は、『大蛇の王』の動きを乱すという一点のみに目的を絞つたものである。元より、それで倒せるとは考えていない。

召喚魔術によって使役されるものは、分類上の名前で実在精霊と呼ばれている。

独立第五大系とも呼ばれる魔術大系 化身大系。

その大系の中において、メルニーーの使用する召喚魔術の他には、精霊魔術、傀儡魔術、憑依魔術の三つが存在している。

召喚魔術は、実在精霊を使役する魔術だ。顕現に媒体を必要とせず、術者の意思の一部を自我として内包し、独立した行動を取れる化身である。

精霊魔術は、虚構精霊を使役する魔術だ。顕現に媒体を必要として、術者の意思の一部を自我として内包し、独立した行動を取れる化身である。

傀儡魔術は、実在、或いは虚構人形を使役する魔術だ。使役対象は人型に限らず、術者の意思を写し、身体の一部として操り動かす化身である。

憑依魔術は、知覚や感覚を外界と共有する魔術だ。魔術による妨害がなければ、他者のみならず人形や精霊にまで効果の及ぶ特殊な魔術である。

実在精霊である《大蛇の王》は、だからマルティウリやアサルダの銃撃を無視出来ない。

なまじ自己の判断によつて、魔術師の指示なしでも動ける代わりに、外部からの刺激にも相応の反応を示してしまつ弊害。

メルニーーは視界の端に、アリストルの姿を捉える。渦巻く《大蛇の王》の巨体を盾に姿を隠しながら、恐らくは狙撃ポイントを探していたのだろう。

僅か一瞬の、視線の交錯。

持ち上がる狙撃銃を認識し、メルニーーは《大蛇の王》の巨体を意に従えて持ち上げる。直後に炸裂したズドン、という轟音に若干身体を強張らせ、しかしあるはずの被害は、ない。

外したのでしょうか？

考えて、それはないだろうとすぐに打ち消す。
では今の銃声は、と考えたところで

「 うぐッ！？」

マルティウリとアサルダの銃撃の音に紛れて、聞き取れたのは一発の銃声。

だがそうと認識する前に、メルニーーの背中を強烈な衝撃が襲つた。

身体が揺らぎ、白い傘がその手から零れ落ちる。

撃たれた、と認識して、メルニーーは数歩を進みながらも踏み止まる。肩越しに視線を配れば、既に後退して距離を取つたエティカの姿が、蛇身と石畳の隙間にあつた。

その傍らには消滅間近の《制眼の蛇》が、ピクリとも動かずに横たわっている。

まさか狙撃銃の最初の一撃で……、では今の一発の銃声は？

一発は、背後からメルニーーを狙つたエティカの一撃。

ではもう一発、恐らくは狙撃銃の発砲音だったであらうそれは、何を狙つたのか。

その答えは、メル二ー二の背後に迫っていた。

「呆れたな。鎧代わりに蛇皮を着込んでいたわけか」「へへ、ああ……っ！」

背後、至近から聞こえた声に、メル二ー二は振り返りながら飛び退ろうとして、銃撃を受けた背中の一点に短剣の刺突を受けた。抉るように回転を加えられた、重く鋭い一撃。

二発目は、もう一匹の『制眼の蛇』を狙つて……っ！？

刺突の威力に押し切られるまま、メル二ー二はサリファンから距離を取る。破れた浴衣の下には、薄らと浮かぶ鱗の模様が見て取れた。

拳銃で撃たれ、短剣で刺されながら、しかしメル二ー二が受けたダメージは少量の血が滲む程度のものである。

その小さな戦果を目にして、サリファンは目つきを険しくする。追い縋り、振るわれた短剣の一振りが、メル二ー二の腕を捉え、そして弾かれる。一度、三度と振るわれる短剣は、接触の度に体表を覆う鱗に小さな傷を刻むが、ただの一度も貫くには至らない。

襲い来る剣劇を両手で払いながら、メル二ー二は目を細める。

鎧代わりのこの鱗も、魔術の減殺効果に当てられて身体に馴染まなくなっていますね。とはいっても、生身で受けければ確實に腕が飛びますし……。

サリファンの攻撃を避け切ることは叶わず、短剣を受けた際の傷からは血液が滴っている。更に、周囲を取り囲む『大蛇の王』の外にはまだ四人の？虚人？達が控えているこの現状。

開かれた門まで、約十一メートルの距離をどうやって稼ぐのか。

まさかこんなところで、切り札の一つを披露することになるとは思いませんでしたが。

小さく深呼吸をして、メル二ー二はサリファンと視線を合わせる。視線の交錯は、一秒に満たない。

そして次の瞬間には、今まさに短剣を突き出そうとしていたサリファンの身体が、そのままの姿勢で前のめりに倒れる。受け身さえ取らず、石畳に短剣を突き立てるようにして、そこから横倒しに転がり、しかし石化したように動きがない。

それはメルニーニの秘匿する魔術、概念系拘束魔術《制圧の魔眼》^{スペクタクル}の発現だ。

「サリファンさん……っ！」

灯台の壁際へ移動し、瓦礫の上に立て丁度その瞬間を目撃してしまったエティカが、驚嘆と悲痛を織り交ぜたような声を上げる。その声を聞いたメルニーニはエティカへと振り返り、その過程で視界に入つたアリストルの姿に言いようのない悪寒を覚えた。ほどんど意識の追いかぬまま、反射に近い感覚で、メルニーニは《大蛇の王》の巨体でアリストルとの射線を遮る。

直後に響いたのは、腹の奥を揺らすような重い銃声。

メルニーニの眼前で、《大蛇の王》の血肉が弾けた。

脱着式の弾倉に詰め込まれた弾丸がなくなるまで、アリストルは引き金を引き続ける。

発砲し、薬莢を排出させ、発砲し、薬莢を排出させ。
繰り返し、繰り返し、ただ執拗に、引き金を引いて。

その剣幕に注意を引かれ、爆ぜ行く《大蛇の王》の巨体をただ見守ることしか出来ず。

遂に貫通させることも出来ず、空いた弾倉を捨てて。
荒ぶる《大蛇の王》に、敵の一掃を命じようとして。

意識の隙、《大蛇の王》の防壁を抜けたエティカの向ける銃口が、メルニーニを捉え。

「 動かないで下さい。いくら貴女でも、この至近で頭を撃たれたくはないでしょ？」

「、.....」

ゴクリ、と硬い感触を後頭部に感じて、メルニーニは自らの不覚を悟った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9154y/>

虚構世界の魔法使い

2011年12月31日21時48分発行